

成瀬記念館

2014



N^o.29

日本女子大学成瀬記念館



阿部次郎

阿部次郎をめぐる手紙展

2013年9月24日～12月21日



平塚らいてう 田村俊子書簡



網野菊書簡

青木生子元学長・名誉教授、岩淵（倉田）宏子教授、原田夏子元専任講師により研究成果をまとめた『日本女子大学叢書五 阿部次郎をめぐる手紙』が、2012年に山形県酒田市から「第29回阿部次郎文化賞」を受賞したことを記念して開催。

網野菊、板垣直子、田村俊子、平塚らいてう、湯浅芳子、鈴木悦等の書簡を多数紹介した。



展示風景

激動の時代を生きて—

高良とみ展

2014年1月14日～3月4日



とみが引退後に描いた絵

本学英文学部14回生で、心理学者・平和活動家・参議院議員として活躍した高良とみ展を開催。激動の時代を常に前を向いて歩み続けた96年の軌跡を5つのパートに分けて紹介、その生涯を辿った。



ポスター

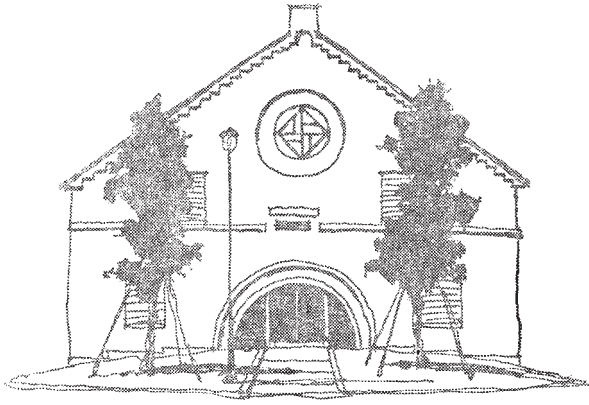


展示風景



愛用したスーツケースとタイプライター





成瀬記念館 2014

No. 29

目次

口絵

阿部次郎をめぐる手紙展

激動の時代を生きて―高良とみ展

巻頭言

成瀬仁蔵の死に際しての受容と信念……………佐藤 和人… 4

随想

眞島利行日記と黒田チカ資料にみえる

丹下ウメ……………永田 英明… 6

宮本美沙子先生の思い出……………黒瀬 優子… 8

キャンパスにしたい雑司ヶ谷境界……………葉袋奈美子… 10

研究

戦時下における歌集『茶の花』・『白堊』の誕生

―付 『茶の花』翻刻―……………濱田美枝子… 14

新資料紹介

新発見史料「平塚らいてう」の答案を読み解く

―成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の概要から考える―

……………中寫 邦… 34

未発表資料

成瀬仁蔵講話Ⅰ 大学部全体の御話

―明治四十四年五月三十一日―…………… 51

未発表資料

「大正拾貳年九月一日 震災善後録 記録係」…………… 60

研究ノート

「軽井沢山上の生活」の詩について

―原詩を尋ねて―(下)……………片桐 芳雄… 83

成瀬記念館

二〇一三年度活動の記録…………… 84

二〇一三年度展示の記録…………… 89

表紙題字・成瀬の文字は創立者の自署 カット・江口まひろ

成瀬仁蔵の死に際しての受容と信念

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

佐藤和人

日本女子大学の創立者である成瀬仁蔵は、一九一九（大正八）年三月四日午前八時過ぎに永眠しました。その生涯を振り返るとき、死を間際にしての成瀬仁蔵の言葉や行動から、私達はあらためて創立者としての確固たる信念と生き様を学ぶことができます。当時の『家庭週報』に「医者立場より見た故成瀬校長」という矢田浩蔵医学士の記事が掲載されています。矢田医学士は一月一八日以降、死に至るまでほぼ毎日診察を続けた医師ですが、初診時に「その時既に私は実に立派な覚悟を持った方だと思いました」と述べています。一月一八日の初診時に既に臍の下まで肝臓が腫大しており（肝臓腫瘍）、黄疸や血尿をともなう重篤な状態であったにもかかわらず、一月二九日の成瀬記念講堂での告別講演に向けて状態が改善していった様子が綴られています。

成瀬仁蔵は告別講演の中で、「死はごく自然の日常生活である」「今更、何の怖れることがあるのか、又何の悲しむことがあるのか」「私の真実の身体というのは、この中にあるスピリチュアルバデーである。私の品格である。これが永久に滅びることはない」という旨の話をしています。「留守の中に今までの吾々の理想目的をよく達成してもらいたい」とのメッセージを残し、死が生の延長線上にあることを伝えています。

小康状態が続くかと思われていましたが、二月下旬より出血性の腹水が貯留し始め、病勢の急転直下の増悪が見られました。しかし、その後も特に苦痛を訴えることはなく、「全く安心だ」「全て満足だ」という言葉と共に眠るように永眠したのです（享年六〇）。永眠後の検査で、腹水はほとんど血

液に近く三升半（六・三リットル）も貯留していたとされています。そのような状態にも関わらず、「食養日記」に記されているように、「こういう機会をとらえて研究しなければほんとうの研究はできない」と自分を対象に病人食を研究するように指示しています。玉木直子、大岡蔦枝は「食養日記」の中で「料理をするのは心がなければできない、料理をするということもやはり一つの芸術（アート）だからそのアートを得、またそこに達するにはどうしても心でなくては行き着かれないのだ」という成瀬の言葉を紹介しています。「比較的終焉まで、よく召し上がったという方のは、鯛のうしを、（目だま）煮凍り、あんこう鍋、むつの目だま、かきあわび、絹こし豆腐、…お菓子はカステラ、芭蕉煎餅、…」。五〇日間の「食養日記」にはその詳細が記され、「私共がこの間にご病人から与えられたる精神の糧は味わえば味わうほど尽きることはないでございます」と述べています。

その死に際しての言動から創立者の確固たる信念と死の受容が窺えます。また同時期の総合大学構想について『家庭週報』には総合大学基金寄付申込報告が記載されていますが、成瀬仁蔵は「基礎は物質ではなく精神である」「資金募集よりも何よりも学生及び卒業生の精神修養、信念涵養が最先である」と述べています。私達は改めて創立者の志を学びたいと思います。

二〇一四年四月

眞島利行日記と黒田チカ 資料にみえる丹下ウメ

永田 英明

ご存じの通り、丹下ウメは、一九一三年に東北帝国大学に入学し日本の女性大学生となった三名の女性の一人である。日本女子大で長井長義に師事しその強いすすめで東北帝大を受験した彼女は、東北帝大時代は、戦前期日本の有機化学研究を代表する化学者・眞島利行の指導を受けた。眞島はやはり日本初の女性大学生である黒田チカの指導教官でもあり、いわば初めて女子学生の指導教官となった帝大教授である。黒田もまた東京女高師在職中に長井の強いすすめで東北帝大を受験しており、

その意味で長井と眞島はともに、女性化学者の育成・指導の意味をいち早く認識し重要な役割を担った存在といえよう。

眞島については、その日記が二〇〇七年に当館に寄贈され、すでに一般公開されている。眞島日記の中に丹下の名前が見える回数はそう多くないが、自宅を訪ねてきたり大学で実験をしている学生たちの名前のなかに、時折丹下の名前がみえる。また大正一〇年四月九日には、東京出張中の眞島が参加した東北大出身者の会合が記され「丹下女史も出てたり。恰も同氏の送別も兼ねたり」と記される。この年の五月米国学留学に旅立つ丹下の送別会が、眞島参加のもとで東京在住の同窓生の手でおこなわれたようだ。

そのような中、昨年本学では、丹下と同時に東北帝大に入学した前記の黒田チカの資料をご遺族から受贈

した。その中にも、実はわずかながら丹下ウメにかかわる資料がある。一つは、昭和二二年一月四日付で黒田に送られた眞島の手紙である。手紙は新年の挨拶をかねて送られたものだが、戦後の復興が目に見えるかたちで進んできたことをうけ「此事などを気にせずに皆志士の心となりて人のため世のためにと働けばそれがやがて自分のためにも国のためにもなります」と、前向きな心境を語っている。そのなかに次のようなくだりがある。

女子教育も大に变革せられアメリカ式となるようです。益々壮健でリードしていただくことをお願ひします。丹下さんはアメリカに長らく居られましたので一層この際活躍されることを望みます。男女共栄ダンス授業などと世之中は兎も角陰気てなくなりました。悪いサイドを除き善き

サイドを助長したらば心配する必要はないと存じます。要は確人が確固たる意志と良心とを有することにありと思ひます。

戦後の復興に当たり、女性研究者・教育者のリーダーとして、眞島が黒田と丹下の二人に期待を寄せていたことがわかる。

黒田資料にみえる丹下ウメ関係の資料でもう一つ興味深いのが、下の写真である。前列右から丹下（前列右端）、保井コノ（同右から二人目）、黒田（同左端）、辻村みちよ（後列左から二人目）などといった女性化学者たちが勢揃いして眞島を囲んでいるが、その中で後列眞島の後ろに立つ和服姿の女性は、丹下・黒田と並ぶもう一人の日本初の女子学生であり、黒田と晩年に至るまで交友のあった、金山（牧田）らくと思われ。年代を特定できていないが、戦



眞島俊行と教え子たち

後間もない頃のものであろう。東北帝大のみならず理化学研究所でも師事し眞島ともっとも関係の深かった黒田を中心に実現した会合であろう

が、ここにも、黎明期の女性科学者たちと眞島の関係をうかがうことができよう。同時にこの写真は、丹下・黒田・牧田（金山）の三名が一

緒に写っている唯一の写真でもある。昨年（二〇一三年）は丹下ら三人が東北帝国大学に入学し日本初の女性大学生が誕生してから百周年にあたり、東北大学ではこれを記念した各種の行事を開催した。当館では、前記黒田チカの資料が寄贈されたこともあり、やはり記念行事の一環として「女子学生の誕生―百年前の挑戦」展を開催した（九月二七日―二月二七日）。黒田チカ資料はまだ未整理の状態で今後整理を進めていくことになるが、その中から、黎明期の女性科学者たちをめぐるネットワークが、より具体的に明らかになっていくのではないかと期待している。

（東北大学史料館准教授

ながた ひであき）

宮本美沙子先生の思い出

黒瀬 優子

昨年一〇月六日（日）、突然宮本先生が逝去されました。私が日本女子大学家政学部児童学科に入学しましたが、昭和四八年四月で、それ以来ずっと心の中でお頼りしていた先生がいらっしゃらなくなり、寂しい思いをしています。

大学のお授業での印象はカッコイイでした。当時心理学をやりたいと考えていた私にとって、外国の心理学者の実験結果など最新の情報を教えて頂けたことはとてもラッキーなことでした。高校は男女共学の進学校でしたが、宮本先生ほど頭がよく、気配りなされる方にお会いしたこ

とは無く、先生に憧れを抱いたものです。また、普通の授業とゼミの時の服装が若干異なり、ゼミの時の颯爽としたスーツ姿は仕事をする女性の代表のように感じました。翡翠の緑色のアクセサリーも素敵に思えました。授業の中で心に残っているのは、「課題を与えられ、すぐにレポートを書きださなくとも、暫く心の中で考えていることが書くことに繋がる」というお話です。今でも、課題に関して電車に乗ったり、歩いたりしている間も考えていることがあります。温めている時間を大切にしています。卒論では、「達成動機」について書こうと、人気の宮本ゼミに入れるように必死にアピールし、何とかゼミに残ることができました。そして卒論の準備に早稲田大学に通い始めました。当時助手をしていらした加藤先生と共同執筆者の友人と

三人で豊坂を下っていたのを懐かしく思い出します。宮本先生は早稲田大でいろいろな研究者の方々と達成動機研究会を作っていたのです。ここでも、最新の心理学を英語の論文より読み解き、研究の手ほどきをしてくださいました。やっと、卒論



宮本ゼミ
宮本美沙子先生（前列左から2人目）と筆者（前列右端）

を書きあげ、卒業が決まってから、ゼミの学生全員を先生のお宅に招待してくださいました。みんなで遊んだゲームも心理学でした！

そんな心理学三昧の日々からご縁があったのか、附属豊明幼稚園に勤めることになりました。就職して自分に足りないことがたくさんあることに気付き、必死でいろいろなことを吸収していた頃の夏休みに、宮本先生から原稿の清書をしてほしいと依頼がありました。『幼稚園』という翻訳書です。先生は達筆でいらして、原稿の字が読み辛いらしいのです。先生がお書きになった原稿をひたすら書き直すというアルバイトでした。ですから、先生のミミズが違ったような字(?)を見るととても懐かしいです。お通夜の席で頂いた先生直筆の経歴を見たとき、胸がいっぱいになりました。幼稚園に勤務する私の勉強になるようにとの配慮

もあつたかと思えます。宮本先生の親心を感じます。

先生との原稿の受け渡しの方が池袋駅ということがありました。ホームのベンチに座っていらした宮本先生がその時初めて普通の方だと気付きました。また、清書のアルバイトでは、かかった時間をきちんと計って請求してほしいとおっしゃられ、教え子に対しても実に対等だと感じました。本が出来上がったときは、嬉しかったのと、お手伝いできた喜びを感じました。

また、原稿の清書のお手伝いをし、先生が東京大学の学位を取られた時には、ゼミ生でお祝いをしました。ゼミ生(新二七回生)で集まったのは、最初で最後でしたが、先生に喜んでいただけ、幸せに感じました。学長先生になられてから、幼稚園の入園式・修了式・夏の保育などにいらしてくださいました。とても気

さくに子どもたちに話しかけ、挨拶は幼児向けに短くてはつきりしていました。保護者向けには日本女子大学の素晴らしさをアピールしてください、私は授業のように先生のお話を聞いていました。

宮本ゼミの同じ回生のうち、篠原(豊明小学校)・高石(事務)・私の三人が本学に奉職しており、勤続二十周年の賞状をその頃学長でいらした宮本先生から三人揃って頂いたときは感慨無量でした。恩師の宮本先生との絆を感じたものでした。平成一三年に勳三等宝冠章を受勲された時には先生は輝いていらつしやいました。卒業生の我々までも誇らしくつたものです。

先生が活躍され遠い存在に感じられるようになった頃、卒業三〇周年をお祝いする会が桜楓会主催で椿山荘にて開催され、宮本先生も出席してくださいました。その日突然に

「二次会を幼稚園でいたします」とお伝えしたところ、なんと先生が幼稚園の玄関付近でお待ちになつていました。もう、びっくり!! 保育室で茶話会が始まり、卒業生それぞれの三〇年をニコニコ微笑みながら聞いてくださいました。平成一九年一月のことです。あの時、なぜみんなで記念撮影をしなかったのかと、今になって悔やまれます。

「まさか、おたくわんをつかんで買おうとしているところを皆さんに見せるわけにいかないでしょ」と、プライベートをお見せにならなかつた先生。お宅ではピアノを弾いていらしたのですね、しかもロマンチックなシヨパンを。冷静で、心が温かな先生らしいです。会議にご一緒した際、「会議では何でもいいから自分の意見を言わなければ出席した意味がないでしょ!」と、叱られました。先生はどの会議でも、必ず発言

され、的を射た意見を端的に述べられていました。

この原稿を書くにあたって、久しぶりに若かりし頃を振り返り、『やる気』について一所懸命勉強していたことを思い出しました。『やる気』を学んだ者として、今後も『意欲のある子』を育てていきたいと思えます。ゆとりのあるやる気、友だちとの関わりで増すやる気、無心になったときのやる気、子どもが遊びに没頭している姿は素敵です!

最後に、宮本美沙子先生のご冥福を心よりお祈りいたします。きっと、先生は日本女子大学をいつまでも見守ってくださるような気がします。

(一九七七年家政学部児童学科卒業・附属豊明幼稚園園長

くろせ ゆうこ)

キャンパスにしたい

雑司ヶ谷界限

菓袋奈美子

目白キャンパスにある緑豊かな大学の寮は、雑司が谷一丁目町会の会員であることご存知でしょうか。キャンパスの大半は文京区目白台に住所を置きますが、寮地区、そして成瀬先生の眠っていらつしやる雑司ヶ谷霊園の住所は、豊島区雑司が谷です。今や大学への最寄駅も副都心線雑司が谷駅となりましたから、雑司ヶ谷(注)は大学生生活にとって、とても縁の深い場所です。

雑司ヶ谷には、本学の教職員の方そして学生や卒業生もかなり住んでおられるようです。卒業生で、さく

らナーズリーグを立ち上げ、雑司が谷宣教教師館の保存運動にも尽力し、長く、わがまち雑司が谷」という地域誌を、発行していらした前島郁子様もその一人。その他にも数多くの女子大関係者が、地域に様々な影響力を持ってきました。

卒業生でもある私が、大学に教員として戻ってきたのは五年前。学生の時には雑司ヶ谷は池袋に行くためにたまに通る程度の場所であり、特に関心を持っていませんでした。しかし、今は大変面白い町だと思っ学生とともに勉強していますし、もつと大学が雑司ヶ谷を大切にすると、キャンパスライフが豊かになると思っています。ここでは、今、私と周りの学生がどんな形で雑司ヶ谷に係っているのかをご紹介します。係り方には大きく三つあります。

①住居学科の学生に密集市街地を学ぶ場として

大学に隣接していますので、とても気軽に見学に行かれる場所です。住居学科の学生の設計演習の敷地としたり、講義科目でのレポート課題対象地としたりしています。雑司ヶ谷は住宅地として、計画的に作られた町ではありませんが、豊かな生活を営もうという気持ちの高い方が沢山住むことで、人にやさしい環境が作られています。その良さを、住居学科の学生に体感してもらい、授業で学んだ知識を使って空間を読み取る練習をし、住生活の環境に対して専門家として必要な感性を培う素敵な場所となっています。

②研究の対象として

木造密集市街地は、来る大震災に備えて、特に重点的に整備されることになっています。雑司ヶ谷界限も

その対象。実は既に三〇年以上も、災害に備えるまちづくりをすべく、取り組みを行ってきた町でもありません。今も住宅の不燃化促進、旧高田小学校跡地の防災公園化等の取り組みが動いています。私のアプローチの軸は、どうしたら、災害に安全で、かつ現在のように車があまり通らず、高齢者の方の買物カート（シルバー



旧高田小学校跡地を考えるワークショップで手伝いをする学生

カー)やベビーカーが道の真ん中を堂々と歩き、子供達が元気に遊び、地域の方が隣近所と立ち話を楽しくできる路地が維持できるのか、という点です。家政学部紀要に毎年「雑司ヶ谷研究」を掲載していただいています。道路の構成、住宅のつくりと路地の関係、地域の人を繋ぐ機会になっているお会式の運営、等、切り口は様々です。様々な角度から雑司ヶ谷の魅力を確認しつつ、路地のある生活環境を残した、安全なまちづくりの手法を実践的に開拓したいと考え、研究しつつ、地域のお手伝いをさせていただいています。

③学生の「自発創生」の実践の場として

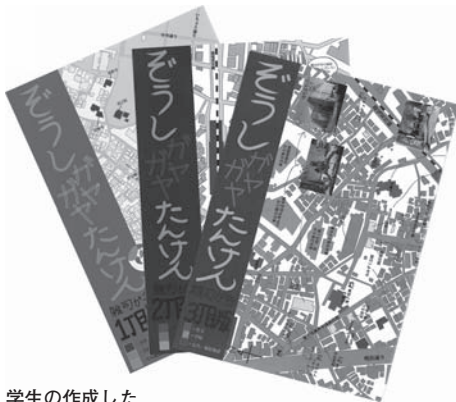
本学の教育の最も良いところは、学生が活動的になることを応援する姿勢があることではないでしょうか。私もそう育てられましたし、学生が

そのように育っていくことを応援したいと思っています。今、二つの活動が動いています。先ず一つは、総合研究所の研究の一環として、雑司ヶ谷を舞台に学生の学びの場を拡げる可能性を実践的に研究しています。学内外に「ぞうしガヤガヤたんけん」という小さな冊子を配布しています。二三年生の学生有志が集まり、夏休みや春休みを使って作成。

大学生から見た雑司ヶ谷の魅力が盛り込まれたものです。これまで三冊作成されました。授業で学んだ視点での雑司ヶ谷の路地裏の様子の紹介、雑司ヶ谷を舞台にした設計演習成果の紹介、雑司ヶ谷にまつわる研究の紹介、そして学生が魅力的だと思っただお店や事業所へのインタビュー記事で構成されています。授業以外の時間に自発的に自分の力を伸ばす機会になっています。

もう一つは、「わいわいぞうしが

や」という団体です。四年生以上の関心のある学生が集まって、豊島区のまちづくり活動助成をいただいています。雑司ヶ谷のまちの将来像を地域の方と創り上げるための活動組織を立ち上げました。まだ活動を始めて三年目ですが、地域の方からの信頼は厚く、ワークショップ等を通して「わいわいぞうしがや」で集め



学生の作成した
「ぞうしガヤガヤたんけん」

た住民意見を活用して、防災まちづくりの活動が進んでいます。地元の行事（大鳥神社のお祭り等）や、雑司ヶ谷霊園周辺の花壇の手入れ（みどりのこみちの会）のお手伝い等も含め、目先の自分達の成果だけでなく、地域の方の求めにも応じて信頼を得てきているようです。

今、どの大学も地域との繋がりを持つことが求められています。そして、人間社会学部が目白に移転することは決まっている中で、寮地区を含めて、大学がどう雑司ヶ谷を活用するのが問われているのではないのでしょうか。寮地区には、豊かな緑があり、また早稲田大学の大隈講堂を設計し、日本の近代建築を支えた建築家佐藤功一的设计した明桂寮もあります。女子大が時間をかけて育んだ伝統を象徴する物を大切にしつつ、地域とどう係りを持つのかを

考える時が来ているのです。また、私たちのキャンパスライフが、キャンパスの敷地の中だけで閉じられていることはとても残念です。文化の香り高い人々が多く住む雑司ヶ谷に、学生が足を運び、或は住まい、その風を受けることは、学生の力を伸ばす機会にもなります。さらに寮と体育館の間にある弦巻通り商店街は、隠れた名店が沢山ある場所です。活用すれば私たちの大学でのLOLがアップすることは間違いなし。地域と共存共栄できる方策を、是非考えたいものです。

（一九九二年家政学部住居学科卒業・
家政学部住居学科准教授

みない なみこ

（注）雑司ヶ谷の表記については諸々ある。
現在の町名は「雑司が谷」であるが、
一九六六年以前は「雑司ヶ谷」と表

記され、七丁目まであり、池袋の南
一帯が雑司ヶ谷であった。また江戸
時代の雑司ヶ谷村は目白駅よりも西
側まで拡がっていた。雑司ヶ谷界限
にはこれらの地域も含めたいことか
ら、本稿では「雑司ヶ谷」の表記を
使用する。

研究

戦時下における歌集『茶の花』・『白堊』の誕生

——付『茶の花』翻刻——

濱田 美枝子

はじめに

『茶の花』・『白堊』という二冊の手作りの歌集が、一九四五（昭和二〇）年、第二次世界大戦の末期に日本女子大学校国文学部四三回生（昭和一七年四月入学）有志の手によって刊行された。当時、彼女たちは一九四四年四月より、学徒動員によって東京第一陸軍造兵廠文書係や第三製造所工務係などの軍の各施設に配属され任務に就く日々であったが、戦時下にあっても文学への学びや創造の志を持ち続け、一九四五年六月、五月の東京爆撃によって焼け野原になった直後にこれらの歌集を誕生させた。現在、水野（旧姓大束）静子氏所蔵の『白堊』の

画像データが一般社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会（以下桜楓会）に所蔵されている。翻刻されたものは「歌集白堊をめぐって」¹⁾に、『白堊』執筆者有志の手によって全歌掲載されている。『茶の花』は、昨夏、清水万里子氏のご家族によって日本女子大学成瀬記念館に寄贈され、現在、同館が所蔵している。この歌集については、所収全歌を翻刻したものはない。

本稿では、同時期に刊行された『茶の花』・『白堊』を通し、戦時下における女子大生の文学との関わり方を考察したい。合わせて『茶の花』所収全歌の翻刻を付記する。

一 時代背景

四三回生にとつては、小学生から女子大学校まで、非日常であるはずの戦時下というものが日常としての生活そのものになっていった。一九三一（昭和六）年には満州事変が勃発した。一九三六（昭和一一）年の二・二六事件などを機に軍部が台頭し、やがて一九三八年（昭和一三年）には「国家総動員法」による強力な総力戦体制が執られた。一九四〇（昭和一五）年一〇月には大政翼賛会が成立し、国民は生活を統制され、戦争体制に組み込まれていった。そして、一九四一（昭和一六）年には太平洋戦争が開戦した。つまり、彼女たちの幼少期から青春期と呼ばれる時代には、侵略戦争の拡大という政治的社会的枠組みの中で国民の意識は戦時教育に染められ、軍国主義に突き進んでいったと言えるのである。「お国のために」というスローガンが国民の生き方を規定し、断念せざるを得ない生を抱えて死に向かつて生きることを余儀なくされた時代であった。それに沿わない個人の本心があれば、心の奥深くに仕舞い込み、建前に生きざるを得なかったのである。

文学においても、一九四一年一二月、文学者愛国大会が開かれ、翌一九四二年六月には日本文学報国会が結成され、文学者たちの多くは、国家主義・軍国主義賛美の

道を自ら、または無自覚に歩みだした。短歌においては、『短歌研究』（改造社、一九四二（昭和一七）年一月号）で特集「宣戦の詔勅を拝して」が組まれ、北原白秋、川田順、土岐善麿、與謝野晶子、窪田空穂、土屋文明、佐々木信綱等、当時の名立たる歌人たち二〇名が大詔を拝しての作品群を寄稿している。それらは、例えば、土岐善麿や土屋文明の次の歌に見られるような戦意高揚を主題とする歌群であった。

撃てと宣らす大詔 遂に下れり撃ちてしまむ海
に陸に空に おほみこと うみ

大勅のまにまに おほみこと 挙る一億を今日こそ知らめアメリ
カイギリスども こぞ 土屋文明

以後も、短歌雑誌や新聞などの公的な場においては、編集者はこのような報国に則った歌を意図的に掲載していったと考えられる。結社などで活動していた歌人たちの作品から何を得ようとするかは、当時の評価と戦後に於ける評価とは乖離する。しかし、どのような時代にあつても、時代の流れの中で一般化されたものとは一線を画する真実の声というものはある。

『茶の花』・『白埴』という二冊の手作りの歌集には、作者自らの内面を吐露するものが多々ある。そこには、

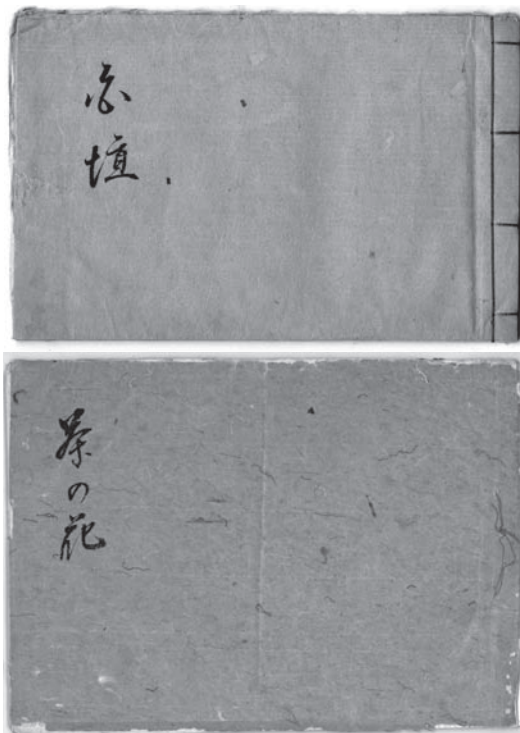
時代の要請とは別の、真実の声がひっそりと語られており、思想統制された戦時下の歌群の中で、これらの歌は異質である。このことが、『茶の花』・『白堊』を本稿で取り上げる所以である。

二 『茶の花』・『白堊』の成立過程

学徒動員により、学生たちは学窓から離れざるを得なかった。『白堊』執筆者の一人である水野静子氏からの聞き取りによると、どのような環境の中でも、少しでも文学、学校の世界に戻りたいという思いが強かったという。水野氏たちは、造兵廠での休み時間に皆で岡本綺堂の『夜叉王』を読み分けて練習し、昼休みに発表したとのことである。「他の部署の人たちも、女子大生のやっていることを見に行こうということ」で、見に来てくれたし、将校さんも来てくれ「た」という。また、『茶の花』執筆者の一人である林田晴子氏も「雨空」³で、昼休みに久保田万太郎の『雨空』の読み分けをしたことを記している。

このように、動員により向学の志を中断せざるを得ない環境に置かれた学生たちは、自

らの手で文学的な場を作り出していった。つまり、文学との関係を断ちたくないと考えるような気運が、国文学部の学生たちの間には色濃くあったのである。水野氏によると、短歌の実作は一・二年の選択科目で茅野雅子氏に教わったという。東組西組合わせて三〇名ぐらいで、自由創作の作品を毎週二首ずつ提出し、翌週添削をいただいたとのことであるから、かなり濃密な創作指導を受けていたようである。その東組と西組の

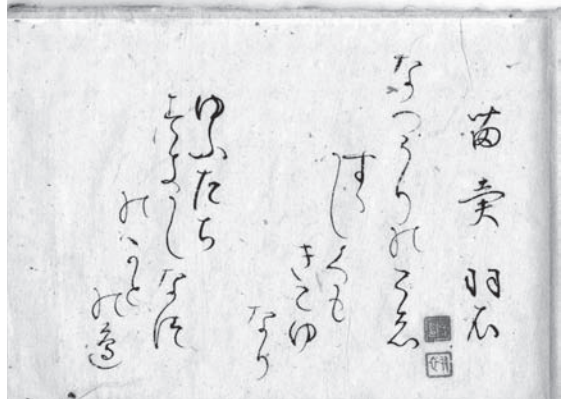


『白堊』(上)と『茶の花』

有志の手によって、やがて『茶の花』と『白堊』が編まれたのである。水野氏は、『白堊』が誕生したのは一九四五年六月二〇日であり、『白堊』を作った後で、『茶の花』ができたのではないかと想像している。『茶の花』については刊行日を特定できないが、林田氏は、『雨空⁴』で、五月二五、六日の空襲で勤務していた造兵廠の管理掛が焼けだされて本部に移ってから「歌集作りの話がまとま¹り、『西組でも（中略）『白堊』が出版された」と述べている。各自が自選の歌を鉄筆で原紙に書き、皆で和紙に印刷して製本したことや、その後、西組と歌集を贈呈しあっているところからも推測すると、『茶の花』は、昭和二〇年六月に誕生したと考えてよいのではなからうか。『茶の花』の執筆者は六名、製本数は清水万里子氏によると「贈呈分と予備を含んで十五部程度⁶」であったようだ。題名の由来は定かではないが、清水氏は、「身につけるものも黒か紺かの国防色の暗いこの時代に、白が唯一の救いだったのかもしれない。『白堊』は名の通り白く冴え冴えています。初冬の道端にひっそり咲く茶の花も、白くまるやかで、ふっと緊張をほぐしてくれます⁷」と記している。ここには、時代がもたらす拘束の中にあっても茶の花のように心安らぐものを求めたい、という『茶の花』執筆者たちの題名に

対する思いが込められていたことが見て取れる。

『白堊』の執筆者は一名、水野氏によると、製本数は三〇部ぐらいだったという。以下、水野氏の談によると、伊藤（旧姓板垣）淑子氏を中心に集まり、水野氏の自宅にあった和紙で一人一冊ずつ歌集を作り、絹の綴じ糸で綴じたという。『白堊』は、長塚節の「白堊の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり⁸」から採っている。結核のため三七歳で死去した節の晩年の作で、死を見つめつつも凜として生きようとする節の清冽さに裏打ちされている、透徹した美しさを持つこの歌は、当時の彼女たちの詠う姿勢に共通するものがあったのであろうか。表紙の題名は、当時国文学部長であった武島又次郎（武島羽衣）先生の孫である多田知子氏が書いた。武島先生は孫の要請で、個々の歌集の第一ページ目に実筆で自作の歌を記し、落款も押してくださいといた。『白堊』制作にあたっては、昼休みに造兵廠の事務所に皆で集まり、共に鉄筆で原紙に書き、印刷もそこでしたという。これは、戦時下にある動員学生の行為としては大胆なものであったと考えられるが、彼女たちの文学を希求する熱意と行為は、造兵廠の上司たちの心をも動かし、受け入れられていたのではなからうか。しかし、五月に空襲を受け、その後、作業場からも焼け出された。



『白埴』に記された武島羽衣の歌

ところが、

こうした中で、六月に『白埴』は上梓されたのである。

それは、伊藤氏がいつもこれらの作品を肌身離さず持ち歩き、焼けて出されてからも風呂敷に包んで持ち歩いていてくれたからであるという。

『白埴』は、焼け出された時も制作中のそれを持って逃げた学生がいたからこそ、誕生することができたのである。このエピソードは、『白埴』に、戦時下という拘束の中で自分たちのアイデンティティーを守り抜こうとする強烈な意志が働いていることを物語っている。ここには、歌という表現を通しての、時代に組み伏せられまいとする彼女たちの姿勢が貫かれていると考えられ

るのである。

当時の女子学生たちは時代と戦った。個人の力では抗することのできない敗戦に向かつての刻々の歩みの中で、彼女たちが何を感じどのように懸命に生きていたのかを次章で考察する。

三 『茶の花』・『白埴』の意義

本章では、これまで見てきた成立の過程を踏まえて、具体的に作品の内容を見てゆくことでその意義を確認したい。なお、引用歌は、『茶の花』については本稿に付した翻刻による。また、『白埴』については桜楓会所蔵の画像データを筆者が翻刻したものである。漢字は現在の通行字体に改めた。

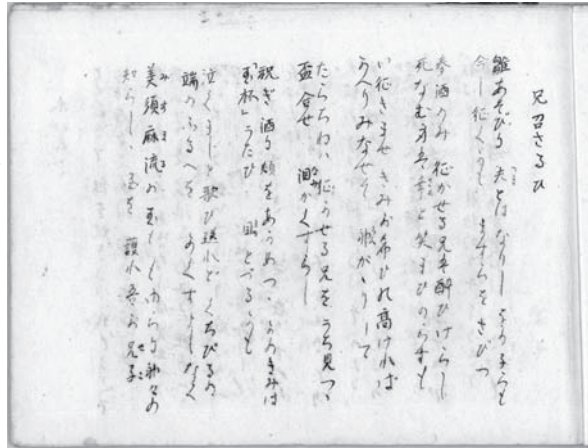
『茶の花』・『白埴』に掲載されているものは、出征兵士を送る歌などの戦時下における非日常を詠んだ歌群もあれば、日常において感じる四季折々の自然の変化に心を寄せて詠んだ歌や、自然詠そのものや家族詠など多様である。青春期の乙女心を初々しく詠んだものもある。それぞれに味わい深いものがあるが、中でも『茶の花』所収の、抗いがたい時代の潮流に真向かう「兄召さるひ」と題する森口弘子氏の一連の作品は見逃せない。

七首の連作である「兄召さるひ」には、「い征きませ

きみが希ひの高ければかへりみなせそ神が、りして」と、止めようのない兄の出征に對して、神が乗り移つていらつしやるから何の心配もなく出征なさつてくださいといふ意の、公的場で通用する歌もある。しかし、次に挙げる歌群は、死の予感と共に出征する兄、それを送る母や妹である氏自身、それぞれが抱え持つ悲痛な思いが詠われている。ここには時代の不条理に對するやり場のない憤りが通奏低音のように鳴り続けているのではなからうか。

麦酒のみ征かせる兄は酔ひけらし死なむ身は幸と笑
まひのらすも
祝ぎ酒に頬をあかめつ、かのきみは「玉杯」うたひ
目とづるかも

右の二首における、「死なむ身は幸と笑まひのらす」、「玉杯」うたひ」という兄の行爲は、お国のために死を覚悟で、勇ましく自ら戦地に臨む思いを鼓舞するようなものではない。作者は、上の句で、「出征する兄は母がこの日のために工面したであろう麦酒を飲み酔つたことよ」と気づいたことを表している。そして、気づいた瞬間、酔つたからこそ「死なむ身は幸」と笑つて言える兄



森口弘子「兄召さるひ」

の胸中深くに出征への葛藤を経た末の諦念が横たわっているのを、敏感に感じ取つたのである。しみじみと兄の心情に思いを馳せていることが、「も」という終助詞に込められている。作者の哀切を極めた心情が全体を覆っている作品である。二首

目「目とづるかも」も、「祝ぎ酒」を飲み交わし高揚する場の雰囲気とは対照的に、深く自らの内に沈潜していく兄の心情を掴み取つたからこそ、表現なのである。たらちねは征かせる兄をうち見つ、盃合せ涙かくすらし

右の歌では、母もまた、盃を合わせながらも悲しみの涙を隠しているようだ、とその時の母の様子を詠んでいる。戦時下の社会規範によって固定化された、毅然として吾子を戦場に送り出すという母親の役割を演じようとする母の心奥は、吾子を死地に征かせねばならないことへの受け止め難い悲痛さに満ちている。その母の本心を感じ取って詠んだことが見て取れる。

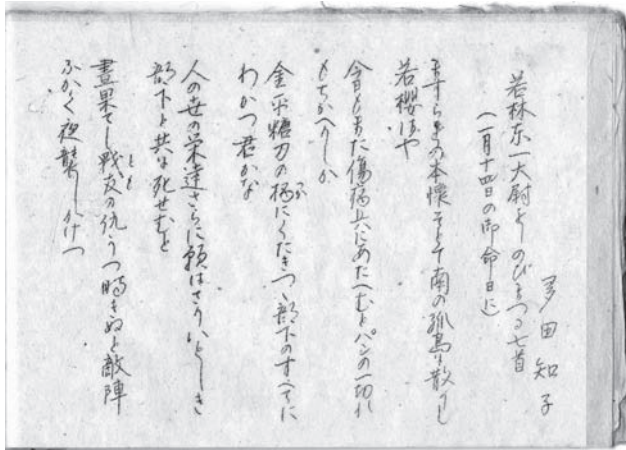
泣くまじと歌ひ送れどくちびるの端のふるへをかく
すよしなく

そして、妹である作者自身、泣くまいと必死で感情をこらえて歌い送るが、「くちびるの端のふるへ」は隠しようがない。その兄を思う自分の姿を表現することで、こみあげてくる沈痛な思いをそのまま素直に詠んでいる。これらの二首には「かくす」という語が用いられており、母・娘両者の内奥にある真実の声の表出は抑えようもないほど重いものであることが表現されている。

次に、『白埴』掲載の数首に注目してみる。

今日もまた傷病兵にあたへむとパンの一切れもちか

へりしか
金平糖刀の柄にくたきつ、部下のすへてにわかっ君
かな



多田知子「若林東一大尉をしのびまつる七首」

これらの歌は、多田知子氏による「若林東一大尉をしのびまつる七首（一月十四日の命日）」と題する中の二首である。作者は、戦死した親しい大尉の真骨頂はこの人格の高潔さにこそあるということ、を、歌によって留めておきたかったので、故人の戦績を挙げてお国の

ために雄々しく戦ったことを詠んだ歌が歓迎されていた戦時下の歌とは、視点を異にしている。暴力的支配が恒常的にあつた戦場で、食料窮乏の状況下でもなお、傷病兵や部下たちという弱者への慈しみを迷いなく発揮し続けた大尉の精神性を掬い上げ、歌を通して表現した。つまり、時代に屈しない、作者自身の人間観に基づく洞察力があつてこそ、大尉と呼ばれた若林東一の、一個の人間としての本質を世に遺すことができたと言える。

女をば嫁ぐべきものと信じ言ふ明るき友に反発覚ゆ
唯一度の見合いによりて嫁ぎゆく人の心は測りがた
しも

また、右の歌は、井村（旧姓海老原）蝶子氏の「道」と題する五首中の二首である。

一九三一年には満州事変が起こり、一五年弱に及ぶ戦争へと突入したが、それに伴い戦争を支える女性の力が求められた。一九三二年三月の大阪国防婦人会の発会を機に、銃後を守る女性たちへの美化、母性称揚の流れが国策によって押し進められ、一九三九年九月の「結婚十訓」によって生まれた「産めよ殖やせよ国のため」という標語に象徴されるように、戦力増強のための母性称揚

政策が執られた。友は、そうした戦時下のジェンダー規範を無邪気に受け入れ、「女をば嫁ぐべきものと信じ」、「唯一度の見合いによりて嫁ぎゆく」という。作者はそのような友の言動に反発や言いようのない不可解さを感じていることを歌に詠んだ。時流に抗して、人間の尊厳についての観点から結婚の本質を捉えている作者の価値観が、明確に表れている歌群である。

このように、『茶の花』・『白堊』所収の多くの珠玉の作品は、当時、公的な発表の場では憚られたであろう、真実の声を響かせている。また、紙幅の都合上触れられないが、たとえば、林田晴子氏の『茶の花』所収の「白蛾」と題する中の、「えうらくのゆれはかそけくやまずしてかたらぬひなに夕きさしそむ」など、自然の美しさに心を寄せて詠んだ作品も多い。戦時下にあつての、この鋭敏でしなやかな感性の表出も、真実の声を掬い取る感性と共通するものであると言えよう。

なお、『茶の花』所収の数首は後に、『昭和萬葉集』に採られた。

軍国主義に塗り込められた彼女たちの青春であつたが、決して時代のイデオロギーに染め上げられていたわけではないことが、歌を通して認められる。これらの歌群の背後から、戦時下に生きる者の時代を見る目、時代との

戦いが立ち上ってくる。彼女たちは時代の持つ不条理さに埋没することなく、時代を跳ね返すエネルギーと行動力を持っていた。つまり、国文学部の学生であった彼女たちにとって、文学との関わりは、自己の生の拠りどころであり、特に、歌を詠むことは、時代に呑み込まれないで生きていることの証の表現として欠くことのできないものであったと言えまいか。ここに、『茶の花』・『白堊』の有する意義がある。

おわりに

以上、本稿で検証したように、戦時下という非日常の時代を背負い、時代と戦った彼女たちの真実の声が示されている『茶の花』・『白堊』の存在意義は大きい。彼女たちは自身の感性や思想を決してないがしろにできなかった。むしろ、歌という表現形態を得て堂々と自らの意思を表明し得たのである。このことは、戦時下にあっても、平時時にあっても、それぞれの時代が抱え持つ不条理さに対する鋭敏な感性と冷静な思索の世界を、個々人が自らの内に育てなければならぬことをも示唆している。また、当時の言論統制下にあつて、これらの作品が戦時下で編まれ、今日に生き延びたのは、私家版であるからこそ可能であったと言える。戦時下に、このような私家

版の歌集の刊行を決行した国文学部の有志たちの熱い想いと行動力は、特筆に値する。それ故、これらの貴重な作品を埋没させてはならないと考える。『茶の花』の翻刻を付記するため、紙幅の都合上、今回は真実の声という観点から『茶の花』・『白堊』について考察するに止めたが、その文学史的意義およびそこから派生する諸問題については今後の課題としたい。

（文学研究科日本文学専攻博士課程後期二年

はまだ みえこ）

〔注〕（1）有志十一名（国文学部）「歌集白堊をめぐる」『戦

いの中の青春—一九四五年日本女子大卒業生の手記—

所収 日本女子大四三回生 卒業三〇周年記念文集委

員会 勁草書房 一九七六・七

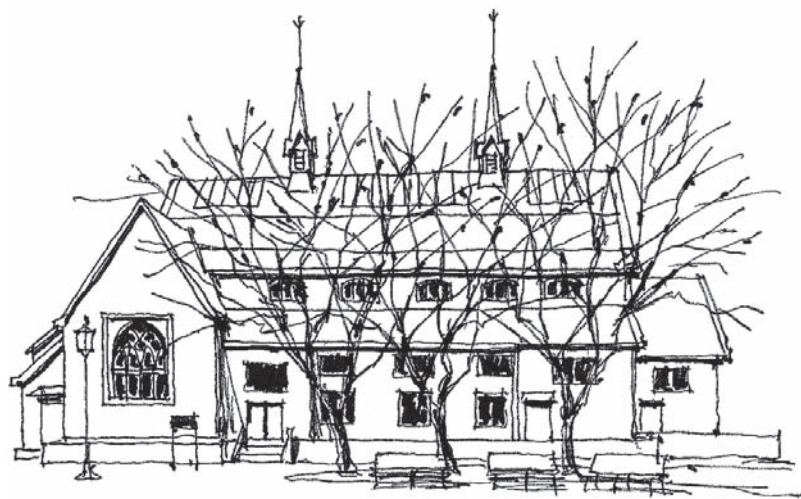
（2）二〇一三年七月二三日においての聞き取り調査による。

（3）林田晴子「雨空」前掲『戦いの中の青春』

（4）同右

（5）『茶の花』前掲（『戦いの中の青春』において、清水万里子氏は「たしか、昭和一九年秋か二〇年早春」に成立と記しているが、清水氏の「ちよと西組も『白堊』を作り、お互いどうし歌集の贈呈をし合」ったという記載や、掲載作品の中に空襲直後の様子が読まれているものがあるところから、この説は採らない。

- (6) 清水万里子「茶の花」前掲『戦いの中の青春』
(7) 同右
(8) 長塚節「鍼の如く」『アララギ』一九一四・六（七
卷五号）
(9) 『昭和萬葉集 卷六』講談社 一九七九・二
- 『白堊』画像提供・（一社）日本女子大学教育文化振興桜
楓会



「付」『茶の花』 翻刻

凡例

底本は日本女子大学成瀬記念館蔵本。

縦 一七・九糎×横 二四・二糎。和綴じ。左側は袋綴じ。楮紙。表紙の色はねずみ色がかった茶色、ただし、当時は「グレーがかった藤色」（清水万里子「茶の花」『戦いの中の青春——一九四五年日本女子大卒業生の手記——』日本女子大四三回生 卒業三〇周年記念文集委員会 勁草書房 一九七六・七）との記載あり）

翻字にあたっては、できる限り原本に忠実にするよう心がけたが、漢字については原則として現在の通行字体に改めた。また、長歌については、私に句切れを施した。

作品掲載順に執筆者の氏名を記しておく。

万里子（清水万里子）・ひろ（森口弘子）・慶子（諸根慶子）・れい子（高野玲子 旧姓菊池）・さえ（福田佐枝子）・晴子（林田晴子 旧姓片山）。

桃咲く

万里子

月しろの射してしげき坂みちに沈丁花のかをり重くたよふ

お姉ちゃまとよびてくる子の手をひきて桃紅く咲く坂下りけり

桃咲けばをさな心のわれにかへりいはけなき児とうたうたひゆく

人間の悲しみちひさし思ひきり友と仰げる春のちきれ雲

人送りはてて夕べの濡れ縁にもだせば白き花の散るみゆ

梅雨けぶる朝の窓の若楓けふを出で征く人と語りぬ

梅の実の青きがまゝに地におちてぬれ縁せまく昼たけにけり
笹ひとつ夕陽のなかに落ち散りてたゆげに暮る径よこぎりぬ

白桔梗心すがしみ投入れしくろき花瓶のくすみたるつや

若き日はうつくしき夢のみといふはたが言ならむ信じかねつも

年たけし人のごとくもこし方をやゝに悲しむ星月夜かな

梔子の花の白さもこの朝はやゝおとろへて土用雨降る

旅にて

にのみやゞと駄標白く立つほとり松葉牡丹の咲き盛りをり

胡麻の花ほつゝ白くひろごれる畑の彼方に昼の海光る

綿雲の浮きてはてなき山の空につゞくごとしも駿河の海は

山の児となり終らむかくろ髪にあかき山母の一枝をさして

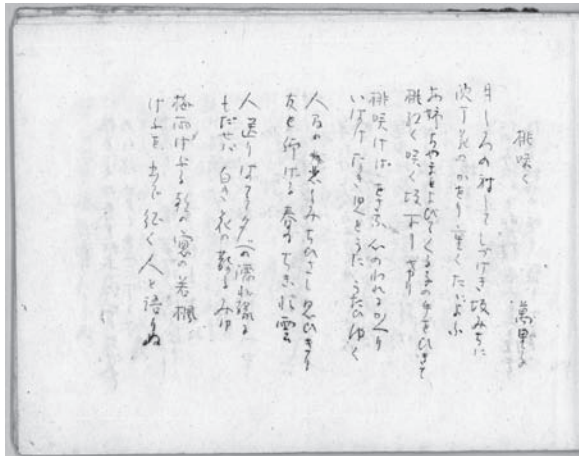
チューリップ

朝陽輝らふ切子の壺にチューリップの紅きが二つ投入れてあり

細き莖曲がりしまゝにみづゝと勁き生命の息づきてあり

曲りし葉にも細き莖にもみづゝと生きる生命のこもらふこの花

ひとりでにチューリップの花向きを変へて切子の壺の陰影濃くなりぬ



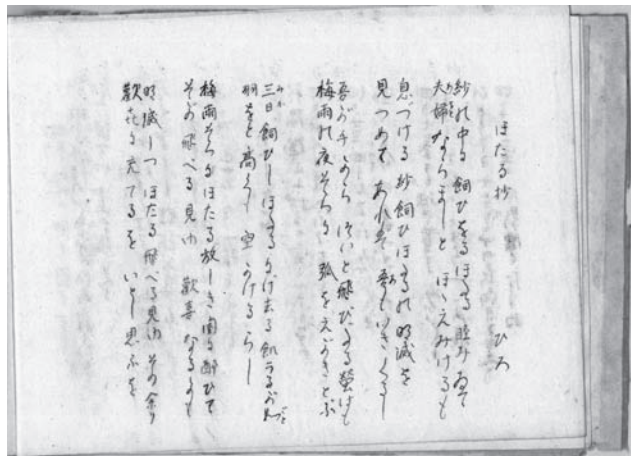
ほたる抄

ひろ

紗の中に飼ひをるほたる睦みゐて夫婦めをとならましとほゝえみけるも
 息づける紗飼ひほたるの明滅を見つめてあれば吾あもいきくるし
 吾が手からついと飛びたる螢はも梅雨の夜そらに弧をえがきとぶ
 三日飼ひしほたるにげ去る飢ううるが如羽ごとをと高くも空かけるらし
 梅雨そらにほたる放しき闇に酔ひてそが飛べる見ゆ歓喜なるかも
 明滅しつほたる飛べる見ゆその余り歓喜に充てるをいとし思ふを

兄召さるひ

雛遊つまびに夫とはなりしをの子らも今し征くかもますらをさびつ
 麦酒のみ征かせる兄は酔ひけらし死なむ身は幸さいと笑まひのらすも
 い征きませきみが希ひの高ければかへりみなせそ神かみが、りして
 たらちねは征かせる兄をうち見つゝ、盃なみ合せ泪かくすらし
 祝いわぎ酒に頬をあかめつゝ、かのきみは「玉杯」うたひ目とづるかも
 泣くまじと歌ひ送れどくちびるの端のふるへをかくすよしなく
 美須麻流みすまろの玉ももゆらに神々の知らし、玉を護れ吾が兄せこ子



木いちじ

とく起きて飯を炊きたり我もかくてをとなびてあり寮に在りては

焼けあとに花あきなふ店見出せり芍やくをかふなみだ垂りつ、

木いちじごに蟻つきにけり庭はきつ帚たてかけちぎり食みしも

かゝるきびしき世に在りてなほ花ばらはつばみ清げにうちひらきたり

大輪のダリヤ挿したるそが上に頬を埋みてなきたくもあるか

日葵向（ママ）の大きな花弁に唇つけてきみを愛すと告げてみたきひ

狂はましと情熱的に手をにぎり黄なる単衣の似合ふひとはも

鳥の声

慶子

松籟のこもらふ山に雪降りて峽があたりともしびつきぬ

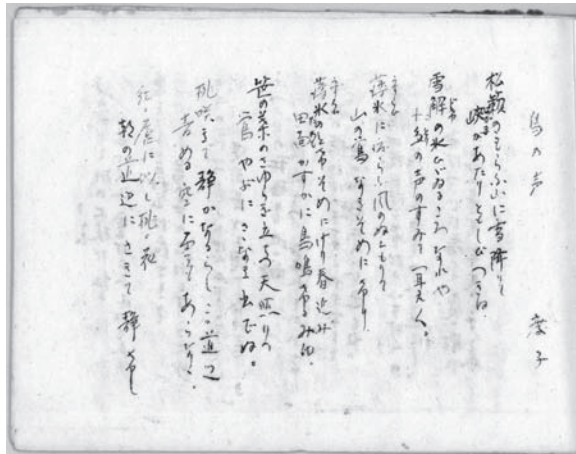
雪解の氷ひゞゐるころなれや小鳥の声のすみて聞えん。

薄水に渡らふ風のぬくもりて山の鶯なきそめにけり

薄水のとけそめにけり春近み田面かすかに鳥鳴けるみゆ

笹の葉のさゆらぎ立ちつ天照りつ鶯やぶにさゝなき出でぬ。

桃咲きて静かなるらしこの道辺青める空に雲もあらなく



紅の唇に似し桃の花朝の道辺にさきて静けし

ほの／＼と桃の上枝ほづえに紅のかゞよふ雲はひたしづもれり

君とこしこの村山は花さきて小鳥の声のひねもすきこゆ

リラの花一つ／＼が思ふまゝ、咲き出づる頃の春は楽しき。

小つゝ、じの紅極りて池の面風おも渡りつゝ、暮れそめにけり。

小波の揺れはかそけくやまずして池の水面みおもにつゝ、じ色もゆ。

庭隅しよに咲きほうけたるいちはずの花さむくしてつゝ、じ色こし。

日のかけはつゝ、じに落ちて庭の樹に鳥の声すむ春の夕暮。

ふるさと

天雲のたむろしゐるがなつかしきふるさとの山恋ほしくなりつ

笹原に葉すれの音のさやぎゐて我に淋しき心おこりぬ。

含ふみたる生命いのちの水に咲き栄えて芍薬の花はおほらけきかも。

くづれ落つほど火のあかり映ろひて君がまなこよ淋しかりけり。

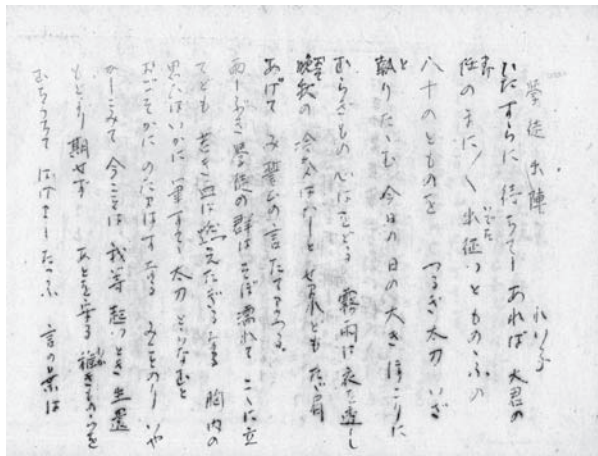
たまゆらの生命きよらに保ちえてこのみいくさにかちぬかむとす

学徒出陣

れい子

ひたすらに 待ちてしあれば 大君の 任まかのまに／＼ 出征いざつとも
 の、ふの 八十のものを つるぎ太刀 いざ執とりた、む 今日の日
 の 大きほこりに むらぎもの 心はをどる 霧雨に 衣を透し 晩おそ
 秋の 冷気は ひしとせまれども たゞ眉あげて み誓ひの 言たて
 まつる。

雨しぶき 学徒の群は そほ濡れて こゝに立てども 若き血は 燃
 えたぎるなる 胸内の 思ひはいかに 筆すて、 太刀とらなむと
 おごそかに のたまはすなる みことのり いやかしこみて 今こそ
 は 我等起つとき 生還もとより期せず あとを守る 稚わかきものらを
 むちうちて はげましたまふ 言の葉は たゞにきびしく 立ちおく
 る 我等をみな の 胸あつく なみだながる、 百千ももぢた足る 学徒のむ
 れの 堂々の 行進おこる 天翔り 陸地くちをす、み 綿津見は あれ
 くるふとも いざ子ども 征ゆきに征かなむ ひたぶるに うちてしや
 まむ 我が立てる 大地は地震なみす ますらをの 足音あしなのま、に 天つ
 ちに とゞろとゞろと ひゞけかし これのあしおと いざわれら



ねもごころの 礼みやげを捧げむ 学徒らの 栄はえの出征いでたち 心こめ 武運いのら
む

返歌

ひた仰ぐ眼のいろはゆるがざりこの秋雨に学徒らは征く

海上日出

足もとにゆたによせくるわたつみのうねりはあをくもやはれむとす

湘南にて

わがこゝろむなしきろかもこゝにして鐵路はろかにかぎろふみれば
汽車よけて土手にふしつゝ晩春の草のいきれをかぎにけるかも

秋

をちかへる雲のそぐへに蒼空の澄めるをみれば秋ちかみかも
むらきものこゝろはたゝにむなしけれ秋たつけふのそらのさやけさ

ふるやう

さはになくかはづのこゑのひゞかひて田の面はあをき風わたる見ゆ

春の月

佐枝

さびしさにたへかねにけりし、ま夜のおぼろの月のかけをあびつ、

あかり消え月の光のほのじろくベッドの中の人を隈せり

あほぐろき木立を洩れて月影の室へにさし入るおぼろくに

あの宵はわがうつ、なき思さへひらになごみぬ月みてあれば

ほそぐと語りてあれば月光に窓あかるみぬしづかなる宵

妹の十三回忌に

いもうとの十三回忌の宵近くにほひゆかしく芍薬さきぬ

香たきて一人しあれば妹のおさながほなど胸にうかびぬ

湯上りに乙女つばきの浴方きて赤き頬してすまし顔なる

おのくのひ、なかざりてむつみるし桃匂ふ日の午下りかな

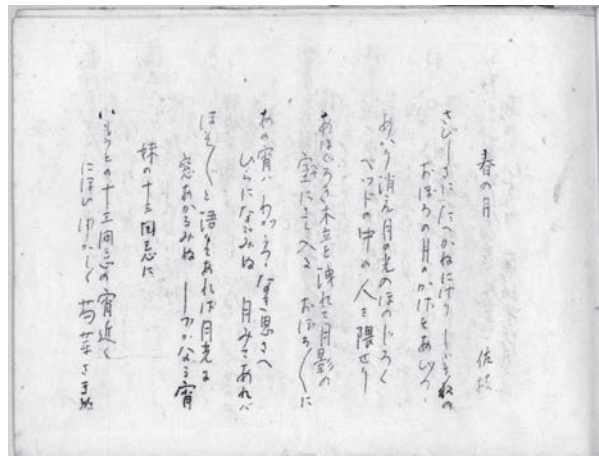
ふるさと

登りきて瀬戸の内海ウツミをみわたせばすなどりのふねおちこちにみゆ

妹と山峡のみちあるきゆけばうすくれないに山つ、じさく

はるの日はれんげつみつ、うたひゆく子らの歩みのかるくしかり

ふるさとはかすみたなびき大空はあほくひろごり平和なるかな



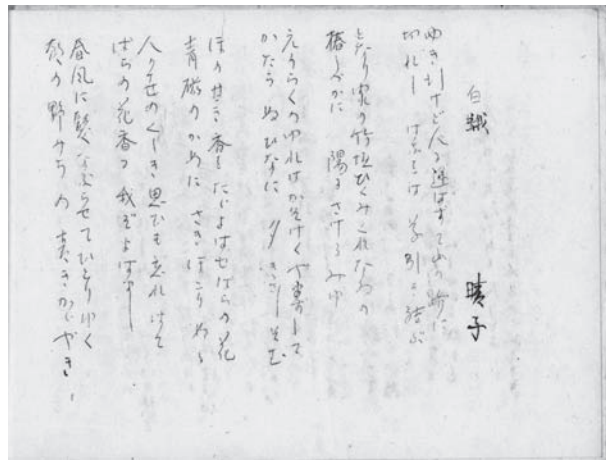
つち

はるすぎて夏を迎ふる乙女らのひとみにしみるつちいきれかも
 新生のよるこびこめてやけあとに若菜めぶきぬなつのけはひ
 くろつちの下なる生命イノチむくくとうごくけはひの大いなるかな
 黒土のいきれうれしもやけあとに下駄ぬぎすて、唄づくりす
 ひとひくのびゆく苗に興がりて鋤とする時はこゝろたらひぬ
 何となく人の香のしてなつかしく夕陽さしくる茄子畑かも
 人間のこころなごめて大つちに生きんとすらんものゝ上るとき

白蛾

晴子

ゆき行けど人に逢はずて山の路に切れしはなを草引き結ぶ
 となり家の竹垣ひくみくれなるの椿しづかに陽にさけるみゆ
 えうらくのゆれはかそけくやまずしてかたらぬひなに夕きさしそむ
 ほの甘き香をたゞよはせばらの花青磁のかめにさきほこりぬる
 人の世のくしき思ひも忘れはてばらの花香に我ぞよはまし
 春風に髪なぶらせてひとりゆく朝の野みちの青きかゞやき



はた／＼とあふげばやがてもえ上るかまどのほのほひたあかきかも

あたらしきのち大らかにいぶきつゝ、ひむがしのおもてにことあるらしき

葉も茎も透きとほるごときみどりなり畠の蔭が陽中さやゝぐ

人のこころのおくがをふかくみる心もたざるわれか今日をくひつゝ、

五つむつ咲きそめにたるあかき色ざくろの花もきゆるたそがれ

あは／＼ともやかうぶれるあかときさ庭べ明く月見草さく

その花のあふるゝごとくさくゆえにあかときには静かにあかるし

めづらかな静をこほしみひまの葉にしみてうごかぬ秋の日を見ぬ

霧の夜に吹きすめる笛のおもしろや郷愁に似し思ひわかしむ

夜くらし角の地藏の香けふり数歩すぎし我をつゝ、みにけり

一瞬を光かともぬからたちの垣のほとりに白蛾とびをり

兵を送る

いでゆかす今宵を明き大き月すみのぼるなりひかしくも間に

生きてまた逢ふを期せざるつはものを送るゆくてに月明くのぼる

拳手の礼力をこめておくりしのち無心のごとくさりゆきたまふ

新発見史料「平塚らいてう」の答案を読み解く

―成瀬仁蔵の「実践倫理」講義の概要から考える―

中 寫 邦

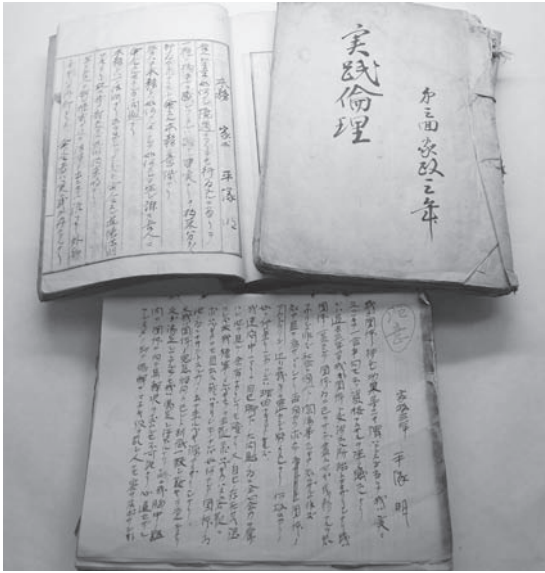
はじめに

二〇一三年二月、成瀬記念館から平塚らいてうの「実践倫理」の答案が発見されたとの連絡を受けた。渡された史料は、平塚明の名で家政科二年と三年の時に提出された「実践倫理」の答案四点で、らいてうが書き残した文章としては、最も古いものであることはほぼ間違いない（史料の全文は、後段に掲載）。

平塚明は、本校創立から三年目の一九〇三（明治三十六）年、数え年一八歳で家政学部¹⁾に入学した。『平塚らいてう自伝 元始、女性は大陽であった』²⁾には、女子高等師範学校附属高等女学校の「官学的な押しつけ教育に

息づまるような思いでいた」時に読んだ成瀬仁蔵の『女子教育』（一八九六年刊）に心をうばわれ、「迷うことなく」進学を決めたと記されている。反対する父親から、母のとりなしで「英文科ではいけないが、家政科ならば」という条件付きの許しを得て入学し、一九〇六年に第三回生として卒業している。

らいてうは、後に女性解放運動家・平和運動家として名をあげた人物であるが、自伝には己の生涯に影響を与えた存在としての成瀬仁蔵校長の思い出や「実践倫理」の講義の話などが詳しく記されている。また大学での寮生活に悩み、次第に冷めてゆく学校生活や心の移ろいに



平塚明の実践倫理答案

についても多く語っている。自伝に記された若き日の心の葛藤の裏付けを答案に垣間見ることができるといえる。「答案」を読み解くためには、はじめに、当時、「実践倫理」において成瀬が語ったことを確認したい。その上で、「答案」を通して若き日のらいてうの心の動きを追ってみよう。

「実践倫理」とは

「実践倫理」は日本女子大学校の創立時より成瀬仁蔵の担当する学科目であった。以後「実践倫理」は校長が行なう講義であり、代々の校長が原則として受け継ぎ、第二次世界大戦後に、大学に昇格してからは学長が担当して、一九六五（昭和四〇）年度まで続いた^③。第七代学長有賀喜左衛門の就任によって、実践倫理は、教養特別講義と名称を変え、必ずしも毎回学長が講義を行なう体制ではなくなり、学内外の多様な講師を迎え、その内容も変化してきているが、現在まで継承されて、日本女子大学の教育の特色を示すものとなっている。多様な課題を提供しているが、大学の理念あるいはその教育方針を自ら明らかにし、その教育実践を反映する、全学生必修の科目である^①。

開校時の日本女子大学校規則^⑤によれば、「第一章 総則」に次ぐ第二章で、学科・科目・修業年限について規定されている。学科目のうち必修に「倫理及社会学」があり、その内容としてあげられているのは、第一学年に実践倫理、第二学年に倫理学、第三学年に実践社会学となっている。以後、実践倫理が各学年に加えられるようになる。当時は家政学部・国文学部・英文学部（当時の呼称）の三学部体制でいずれも修業年限は三年を予定

している。この三学部共通の必修科目が「倫理及社会学」であり、その講義内容として「実践倫理」がおかれていることがわかる。

創立時の「実践倫理」

ここでは、創立時より平塚明が卒業する一九〇五（明治三八）年度までの五年間の「実践倫理」を中心に、その内容をふり返り意義を検討する。成瀬仁蔵の「実践倫理」は教育体制の中で、どのような位置にあつたであろうか。

当時の「実践倫理」の講義内容は、開校時より順次、時を追って『成瀬仁蔵著作集』第二巻から第三巻に収められている⁶⁾。明治三八年以降の講義は、別に『日本女子大学校長 成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記』が成瀬記念館に残されており、これは後に復刻、出版されている（現在も継続中⁷⁾）。『筆記』は即時的に成瀬の講演を記録したものであり、当時の講演の様子がリアルに感じられる。そしてその内容は「実践倫理」に限定されているものではなく、当年度の学校行事に際して行なわれた成瀬の講話がすべて収められている。倫理学、実践社会学などの講義内容も収載されている。換言すればその表題に示されているように、成瀬仁蔵の講話はすべて「実践

倫理」としてとらえられていたと推定できよう。成瀬仁蔵の講義の要が「実践倫理」であつたことを示しているでは成瀬自身は「実践倫理」をどのようにとらえていたのであろうか。

創設期の実践倫理講義の中に「教授法及び試験の方法」について述べているものがあり、そこで成瀬の担当する実践倫理について、次のようにその意味を語っている。

予の受け持つ所は実践倫理学 practical ethics なり。之は純正倫理学 pure ethics に対して云ふ事なり。而して実践倫理学は、純正倫理学の如く、理論、学説等を主とせざるも、其の中自ら整然たる秩序あるものなり。故に先づ之を諸子に咀嚼せしめん事を要す。現今、世界各国にて最も研究の新しきものは、社会学にして、これに続くものは、婦人問題、労働問題等なり。而して是等は凡て practical ethics に含まるゝものなり。故に予が受け持つ處のものは、時々刻々に起り来る活問題にして、須臾も研究を怠る可からざるものなり。諸子と共に直接研究すべきものなる故、学生の進むに先立ちて実行すべきものなり。（中略）諸子各自が研究の第一着として勉むべきものは茲に存す。諸子の生涯に決して減す可からざる處の燃焼力を保つ事を得ば、

予の大いに満足する處にして、之を得るは即ち教育の目的なり。

として、その実現のために、原動力・実力・方法の獲得が必要であり、経験、実験、観察等を豊かにして、各自、実践倫理を原点として、自らが自らに最も適した学課を選び、そして発展していくように述べている。

この講話によってわかることは、一つは、実践倫理は、一般の倫理学のように理論や学説を主として追ったり、紹介することで、その倫理学の内容を明にするということに止らず、実践倫理の独自の体系があること、二には実践倫理において重視されるのは、時々刻々に起つてくる活問題であり、少時もおろそかに出来ぬ研究課題であること、すなわち、現実社会において解決を迫られている課題に常に関心をよせて論ずることである。現在最も必要な課題としてあげられているのは、社会学的問題であり、さらに婦人問題、労働問題などであるという。

この実践倫理の講義のねらいは、一つは学生一人一人の自己啓発を促進することであり、二は学生達と共に生きる現代の課題に対応し、それに挑戦する姿勢を導き出すことであつたといえよう。

日本女子大学の教員である渡辺英一は実践倫理について次のようにいう。

学科目の中心であるが、又校風養成の中心であり、言語を通じて、信念涵養の理論と精神と欲求と感情とを指導し、鼓吹し、刺激し促進する努力であり、又従つて先生が、精神、人格の内容を直接に学生に展開する機関であつた。

当然、実践倫理の内容は幅広く豊かで複雑である。道徳・宗教・哲学・倫理・教育から、女性の役割・家庭・結婚・学校生活の各方面、研究の方法、体育さらに、社会状況、国際問題など、あらゆる事項が、その時々課題としてあげられ、その展開も様々であり、とらえ難いところがある。それは、「豫言者の風格の人であり、或は芸術的実行家とでも評すべき人であつた」¹⁰との成瀬仁蔵の講話の態度と共に、聞く者をして魅力ある講義であつたと思われる。

品格の育成

では、実践倫理の初期の講話において、しばしば指摘され、言及された内容は何か。繰り返し語られた言葉の一つに品性の向上、品格の陶冶があげられる。女子高等教育の機関として設立されたのであるから、高等女学校（現在の中学校・高等学校に相当する四年～五年制の女子校）以上の学問を身につけることは当然であり、学生

達はそれに憧れて入学してきたといえるが、それに止まらず、「重きを置くべきは品性を陶冶し、所謂人物を養成する事なり」（開校二ヶ月を迎へて）「一層大切な品性なり」（倫理学とは如何なるものか）「品性を陶冶する事を忘る可からざるなり」（注意力の集注）「熱心に力を用ふべきは品性陶冶」（杖を捨てよ、自ら歩め）「鞏固なる品性の養成」（分厘の不足）「品格を備へたる淑女たり」（日本女子大学の教育方針について）など、単に高等教育をうけ、知識偏重の勉学中心でなく、人としての品性・品格を内から育てることを求めている。この品性を高める方法として、次の点が指摘されている。

第一に勉むる事は、前にも云える如く、品性を養成すること、即ち実行することを以て主とす。（中略）諸子に、神道にもせよ、仏教、或は基督、或は儒教、何なりとも一の據所を定め、以て其れに到着すべく一向専心に真理を研究せられよ。¹¹

とし、品性を高める際に宗教に接すること、その真理を探究することを奨励し、そこに何らかの拠り所を持つことを求めた。特定の宗教を提示するのではなく、各自が納得する宗教に接することを奨励した。「精神的生命」の講義では、「宗教は神では無く、生命である、信条

ではない、信仰である、heartであるとは誰も同意する処である¹²」といい、宗教に接することについて詳細に述べている。その体験を通じて「換言すれば、理想あり、目的ある人とならざる可からざるなり」とし、その結果として活力を得、「有為の人物とな¹³」ることが期待されている。

人物となる為には時には厳しい提言もされている。

「時に就きて」では、時を用ふる力の大切さを自覚し、あいまいな態度や出来ないとの判断を簡単に下したり、主動者となることを避けたりすることに批判を行なっているし、「何故に諸子の直ちに着手すべき事の遅延するか」では、様々な理由をつけて実行しないことを激しい口調で批判している。「其の時の機会を其の時に得よ」では、決心はそこに止らず、決断・実行に移されることこそが大事であるという。¹⁴常に行動が伴うことが推奨されている。

こうした指摘は各自の自立を促す。「杖を捨てよ、自ら歩め¹⁵」の題目に表れるように、周辺にまどわされることのない、思想と信念のある、実践する人物となることが求められた。

このように品性を陶冶し、自立的な意志力をもった人格の養成に、それまでの米國留学や研究の成果を生かし

て、さまざまな人物の例を古今東西にわたり紹介したり、自からの経験や周囲の話題をとりあげ、知・情・意の関連などを加えて、身近な課題として考えるように述べられている。こうした各人による自らの品格の養成は、知識中心、技能中心の教育体制とは自ずから異なる、私学としての特色を、そして、成瀬特有の講義となつていると言えよう。

天職と本務

品格育成の教育の主張は、先ず身近な学園の環境に影響を与え、団体としての雰囲気(校風)を構成し、協同の心を養い、ひいては愛校心を生むものとなり、そこに団体的精神を養うことにつながるであろうと述べられている。⁽¹⁸⁾

実践倫理は当時であつて、高等教育を受けることができる、特別の恵まれた境遇の女性たちへの強い期待をもつて語られた。「予は諸子に対して二つの希望を有せり」において、「其の一は、理想的教育家に成らん事」とあり、社会における理想的モデルを示す者となること、「其の二は、(中略)社会に於て最も要求し居るところのものならん事を望むなり」とし、意思の鞏固なる事、事に當つて狼狽せぬ事、非常なる忍耐力を有する事、知識

を有する事などが指摘され⁽¹⁹⁾「今日の我が国家、社会、家庭は諸子を待つこと甚だ切なり」という。

この教育姿勢は「諸子生涯の志として全力を注ぐ可きは何なるか」において、自からの「本務」「天職」を問⁽²¹⁾い、社会的地位は本務あるいは天職とは異質のものであり、一人一人には天職があり、「時弊を論じて女生諸子に告ぐ」「大は国家社会より、小は学校家庭に至る迄、到る所より、諸子を招き諸子呼びつ、あるなり」とし、⁽²²⁾周囲に期待される人物であることが提示され、実践に移すことを奨励して、選ばれた者としての天職を果たすことが切望されている。

以上の様な教育姿勢は、当時の女子教育政策や一般的な女子への対応のあり様とは大きく異なっている。例えば、女子の育成の方向として、主張されている良妻賢母主義の教育理念の主張については、賢母・良妻・淑女というが、「之等は畢生の目的とすべき全体にはあらずして、僅かに一部分を指せるものなり」(理想・目的・希望)と指摘しており、女子の全人的な教育の重要性を語り、良妻賢母という、「家」に固定される女性の将来に関しても疑問が出されている。言い換えれば、当時の一般的な良妻賢母の育成は、天皇を頂点とする家族国家観の枠の中に、女性の生涯の歩みを止めておくことであ

り、⁽²⁴⁾このような教育政策における良妻賢母とは異質な考
えである。全人的な人格の養成を女性に求めることは生
涯学習につながり、様々な人生に対応するものである。

若い女性達への期待は卒業後に及ぶものであり、「吾
人の理想」において「諸子が卒業後、大学出身の名に相
応する所の有力なる婦人となり、社会に率先して世人を
導き我が国の教育、及び延いては東洋の知識をも開発せ
られん事を切望するなり」と述べる。⁽²⁵⁾そして「時に就き
て」では「廿世紀は婦人の時代にして、又日本に取りて
は婦人の為の一つの新世界を開始せしものならんと云へ
り」とし、「廿世紀の国民として、我が国家及び広く人
類の為に尽すべき任務と、諸子の生涯に為し遂ぐべき
事」を認識することをうながしている。⁽²⁶⁾それは第二の維
新、即ち明治維新に次ぐ維新を女性自身が着手すべき課
題であるとも述べており、天職の意識をもって自己の周
囲に、家庭生活に、社会生活に向かつていくことが望ま
れている（「第一回卒業生に告ぐ」）。当時の社会への言
及も多いが、目前の日露戦争についても、戦争への客観
的な把握とその克服について述べており（「第二維新を
論じて我国教育の宿弊に及ぶ」）、その反戦の姿勢に注目
した。⁽²⁸⁾

平塚明の卒業時の告辞

明治三十九年の第三回卒業式の告辞において、三年間に
いかなる成果をあげ、学校全体にどのような貢献をした
かを問い、これからの歩みに期待した。そして創立後の
五年を回顧して次のように纏められている。⁽²⁹⁾

創立の時には、混沌たるもので、其の中から第一回
卒業生は、漸くにしてこれを一つの有機体とすること
が出来て、僅かに感情的生命を拵へる事が出来ました
（中略）

第二回の卒業生は知の調和をなした。（文学と道徳、
宗教と科学の衝突ともいふべきものがあり多くの疑問
や矛盾に悩んだ上に一致結合をみた）

第三回の卒業生は感情と知性との調和を得て、各々
円満なる意志を発達することが出来た

とし、この意志の拡大、感化力の増大と共に意志の価値
をより高めることを願い、母校との結合を図って進みた
いと述べられている。卒業後の桜楓会員としての活動が
期待されている。

以上、「実践倫理」の講義を中心に進められてきた内
容の具体的結実が三年間の学生生活にどのように表れた
かを成瀬が述べているといえよう。

人として、婦人として、国民として

創立当初の約五年間の「実践倫理」を通観し、その力点がおかれたところを概略紹介してきた。個人の尊厳を尊重し、個人を高めることに力を注ぎ、それが団体（学園）そして家庭や社会、国家更には国境をこえて広がることが期待されている。女子高等教育の一教育機関の「実践倫理」という一つの学内講義であるというに止らない、広い視野で論じられている。ここには成瀬仁蔵の教育理念、教育理想がこめられているといえよう。それは先に、女子大学創設に当って書かれた『女子教育』第一章 女子教育の方針において、今後の日本の女子高等教育の方針として

（第一）女子を人として教育する事

（第二）女子を婦人として教育する事

（第三）女子を国民として教育すること是れなり

と結ばれていることに対応する。翌年の日本女子大学校第一回創立披露会の講演「女子教育振起策」^{②1}の中で、この三つをあげ、この三つの区別や順序を誤ってはならないとし、人としての教育を基本にすべきことを強調している。

この姿勢は創立時の「日本女子大学校規則」の冒頭において同様に表れており、

本校は過去に鑑み現実に照らし、又大に将来に慮り、茲に女子を人として婦人として国民としての三方面より教育するの方針を執り、本邦女子の心身の能力と日進月歩の社会の状態とに適合せる一定の高等教育を授け、其品位と実力とを高め、能く社会の進歩推移に順応して女子たる者の天分を尽すに足るの素養を与へんことを期す（句点は引用者）

とある。すなわち、人として、婦人として、国民としての教育をめざすとの方針は、実践倫理という講義の中で一時には学生達の意見を發表させて聞くという態勢も組み込みながら一行なわれた。

人として婦人として国民としての教育の基本にあるのは人としての教育であり、ここに力点がおかれ、様々な面から論じられ、それが女性として国民としての在り様に反映されることが望まれたといえる。日本女子大学校という一教育機関に止ることなく、広く各家庭、社会、国家そして国際的に影響を与え得ることを願って論じられたといえよう。

明治三四（一九〇一）年から明治三八（一九〇五）年の時期は、明治維新後、急激に変化をとげた日本社会において近代社会の体制は固まりつつあったが、同時に次代が見えにくい時である。特に当時の思想的混迷は、第

一高等学校生の藤村操の自死の波紋などに表れ、新しい概念としての生命観や人格観をどのように形成していくかの問がだされている。³³このような時に当って「実践倫理」は若い女性達に強い示唆を与えるものであったであろう。と同時に、創立当初にみられる実践倫理の講義は、成瀬仁蔵の教育姿勢を示すものであり、その後の女子高等教育の教育の基底となり、日本女子大学に継承されていったものといえよう。

「感激の実践倫理」——「自伝」より

成瀬のほとばしるような言葉のエネルギーを浴びた平塚らいてうは、自伝で「感激の実践倫理」という項目を設けて入学当時を回顧している。実践倫理については「若いわたくしたちの魂をゆり動かし、突きあげるような迫力に溢れたものでした」「実践倫理は、精神的教養の指導学科ともいべきもので、その内容は、女子大の教育方針をはじめ、宗教、哲学、倫理など多岐方面の話題にわたり、いわば、成瀬先生ご自身の信念と、その世界観をぶちまけたような講義でした」と感想を述べている。

「成瀬先生の熱心な心酔者となった」明は、ノートをとり、質問をし、自分の疑問をぶつけるという積極的学

生であり、それに答える成瀬を「先生の高潔な人格と思想、その焔のような生命力には徹頭徹尾感動し、共鳴したものでした」と振り返っている。成瀬にとって印象に残る学生であったらう。

二年生になると入寮し、実践倫理についての感想をテーマに寮生同士で述べさせる時もあったが、次第に寮生活に疑問と幻滅を感じるようになった。一方、学科目の自由な選択制により家政学部を超えて様々な講義を聞いたり、図書室で読書にのめり込んだ明は、次第に実践倫理にも疎誤を感じるようになってゆく。

平塚明の二年次の答案

おそらく、夏休み前の六月に、実践倫理の答案が出されたと思われる（資料1）。答案は『明治三十七年六月廿二日 家政学部二年 実践倫理答案』という表紙よって纏められた中に入っている。はじめに学生たち全体の答案の内容を総括した表題があげられている。一つは本務の定義、二は本務と品性との関係である。

平塚明の答案の題は「本務」となっている。明の答案では、本務とは一つの法則であり、それを自からが自からに課するものととらえている。しかし自身の品格が進むにつれて本務も変化していく可能性があるのではない

かと論じている。実践倫理では、本務は社会的な体制の中でとらえられており、内在的なものと限らない。だが、明の後半の品格の変化が、本務に影響を与えていくという把握は当を得ていると思われる。実践倫理において、内発的な自己探求を求められたことに率直に真剣に答えた答案となっている。

この後、明は体調を崩し、病を得て退寮し、休みがちになったと思われる。一方、神を求め、人生観を問う姿勢を重ねていく間に、今北洪川（鎌倉円覚寺の初代管長）の『禪海一瀾』に出会い、参禅の道に入る。二年生から三年生になる時期である。

三年次の答案

三年次の実践倫理の答案は提出時が不詳である。一目の答案（資料二）は短い。しかし内容から、知識のみを追い求めた過去を脱して、「宗教的情味」すなわち禅に一筋に向かっている気持ちこそ素直に表現したものとなっている。

二通目（資料三）は、団体（学園）や桜楓会に関わらなかった、あるいは関わろうとしなかったことを率直に書いて、自己の問題解決が優先したと述べている。『自伝』の「人生観の探求」の項でわかる。その上で、団体

が形式的で、そこに今後の課題があることを指摘している。おそらくこのことで答案の冒頭に「注意」の文字が加えられたのであろう。³⁵

三通目（資料四）は卒業をひかえて出された答案である。問が三つ出されており、第一問の問は、他の提出者の答案をみると「果して卒業し得べきか」となっている。明は、この三年間に苦悩し、「自悟自得」し、見性によって静居によって今後の方向をつかみ得、「猛進」すると述べている。第二問の問は「決心ヲ持続スル方法」である。この問に対して今後は「内観工夫ニヨリ 心力を練ると共に一方は研究ナリ思考也（宗教・哲学・文学）思想界ノ客観的研究」をすることを明記している。学生時代の三年間とは違って今後は天職を信じ、多忙な奮闘の生活を開くと決心を述べている。第三問には答えていない。

三年次の答案は、率直にこれからの方向をつかみとったことが語られており、禅によって自らを開きつつある体験が推測される。

明の三年次にあたるこの年の実践倫理で前半において印象的なのは、家政学部と国文学部との間の理解の疎誤や衝突の問題である。これは学生からの報告をもとにとりあげられたのだが、成瀬にとって、学園の一体感に課

題を投げかけられたものである。

三学部部長所と短所を指摘し相互の理解をすすめるよう提言されている。明は学内の対立をあえて避け、自己の問題の解決を優先させている。

後半では「精神的生命」の講義を中心に宗教論を世界的潮流の中に位置づけながら、講義が展開している。禪に魅せられた明にとって関心は論点の外にあり、印象に残るものではなかったであろう。

らいてうと成瀬

成瀬仁蔵の「実践倫理」に啓発されることで始まった学生生活は「先生の女子教育への熱意と献身には深く首を垂れ、先生の人格を信頼し、私も先生の魂の子と自分では思いこんでいたのです」(『わたくしの歩いた道』新評論社 一九五五年)と回想されている。若き日の明に、人生の契機をもたらし、平塚らいてうとしてのその後の足跡に、深い影響を与えた、成瀬仁蔵の講義であったといえよう。

(本学名誉教授 なかじま くに)

(注)(一)正式名称は家政学部であるが、学内、学外にかぎらず「家政科」と表現されることがよくあった。同様に国

文学部は国文科、英文学部は英文科である。

(2) 大月書店 一九七一年。

(3) 第六代学長上代タノの時代に「本曜講座」など、実践倫理を補足するものとして知識人が講演によれば、変化の兆しをみせている。拙稿「上代タノと戦後の日本女子大学」(島田法子・中寫邦・杉森長子「上代タノ」ドメス出版 二〇一〇年)。

(4) 現在は教養特別講義IとIIがあり、講義内容は「日本をみつめるために」と題して刊行されている。

(5) 『日本女子大学校規則 明治三三年』(日本女子大学史資料集第五 日本女子大学成瀬記念館 一九九八年)。

(6) 『成瀬仁蔵著作集』(以下、「著作集」)全三巻 日本女子大学 二巻は一九七六年刊。

(7) 『日本女子学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治三十七・三十八年度ノ部』(日本女子大学成瀬記念館 二〇〇九年)。以後、年度を追って発刊されている。

(8) 『著作集』二巻 二七四～五頁。

(9) 仁科節編『成瀬先生伝』(桜楓会出版部 一九二八年) 三〇四頁。

(10) 『成瀬先生伝』三二二頁、渡辺英一の言。

(11) 『著作集』二巻 二六八頁。

(12) 『著作集』二巻 六二二頁。

(13) 『著作集』二巻 二六九頁。

(14) 『著作集』二巻 三〇五頁。

- (15) 『著作集』二卷 三一七頁。
 (16) 『著作集』二卷 三一八頁。
 (17) 『著作集』二卷 三〇一頁。
 (18) 『著作集』二卷 二八二頁。
 (19) 『著作集』二卷 三二一頁。
 (20) 『著作集』二卷 三〇四頁。勿論、前進あるのみではなく「進歩主義女子教育の一端」にみる様に政治経済を含めた視野をもつ人物となることを希望している。
 (21) 『著作集』二卷 三〇三頁。
 (22) 『著作集』二卷 三四一頁。
 (23) 『著作集』二卷 二七三頁。
 (24) 拙稿「女子教育の体制化―良妻賢母主義教育の成立とその評価」(『講座日本教育史 三』第一法規出版 一九八四年)。
 (25) 『著作集』二卷 二七二頁。
 (26) 『著作集』二卷 三三四頁。
 (27) 『著作集』二卷 三七四頁。
 (28) 拙稿「女性の平和運動への触発―成瀬仁蔵の平和思想と活動」(中寫邦・杉森長子編『20世紀における女性の平和運動―婦人国際平和自由連盟と日本の女性』ドメス出版 二〇〇六年)。
 (29) 『著作集』二卷 六五〇頁。
 (30) 『著作集』一卷に収載。
 (31) 『著作集』一卷に収載。
 (32) (5) 参照。

- (33) 明治三六年五月の事、同世代の学生に影響を与えた。成瀬も言及している。
 (34) 佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』(朝文社 一九九五年) 参照。道徳や倫理関係の雑誌や講演も盛んで当期の不安な思潮の動向を反映している。
 (35) 家政学部の三年生は七七名が答案を出しており、その中「注意スベキモノ」が三名とあり、その中に平塚明の名がある。
 (36) 片桐芳雄「『実践倫理講話筆記 明治三十七・三十八年度ノ部』を読む」(成瀬仁蔵研究会編『成瀬仁蔵研究会活動の記録』(社)日本女子大学教育文化振興桜楓会 二〇一二年) 参照。

〔資料1〕

(表紙)

明治三十七年六月廿二日
家政部二年
実践倫理答案

本務 家、二 平塚 明

吾人ハ日常如何ナル境遇ニアリテモ行為スルニ当リテ一
種ノ拘束ヲ感シツ、アルハ確ナル事実ナリコノ拘束ハカ
ク、行為セネバナラスト命スル本務ノ意識ナリ

然ラハコノ本務トハ如何ナルモノニシテ如何ニシテ生シ
誰カ吾人ニ命令スルモノナルカノ問題ナリ

本務トハ一ノ法則ナリ云々セザルベカラズト命令スル道
徳法則ソノモノナリ故ニ我ニ対スルニ必然的拘束のナリ
シカク吾人ニ対シ權威ヲ以テ法律ヲ出スモノハ誰ソヤ外
部ノモノヤハタ内部ヨリカ、命令者ハ実ニ我ガ内ニアル
ナリ

外部ヨリ我ニナスベク強迫シテ余儀ナク服従セシムルニ
非ズ全ク自律の法則ナリ、而シテコノ我心ノ内ナル

命令者ハ祖先ヨリウケタル社会ノ輿論精神及現ニ生活セ
ル社会ノ輿論及自己ノ智力ノ程度ニヨリテナレル良心カ
ノ中ニアル理想的ノ我(人生終局目的)ナリ、コノ理想
的我ノ命ヲウケテ是ニ対シテ本務ヲ盡スベキ人ハ現在ノ
其人ナリ、ヨリテ今本務ヲ定義シテ

本務トハ吾人ニ理想アリ目的アルヨリ出デタルモノ
ニシテ完全ナル自我ヲ実現セントタメニ理想ノ我カ現
在ノ我ニ向ヒテ課スル所ノ法則ナリ、更ニ略シテ云
ヘバ

我カ理想ヨリ割り出シテ我自ら我ニ課スル自律的法
則ナリ

コノ本務ハ人生ノ理想目的ニ対シテ貫流セルモノナルモ
其境遇ニ由リテ種々ナル形ニアラハレ自己ニ対シ或ハ社
会国家自然ニ対シテ生存ノ義務トナリ又ハ奉公愛国ノ本
務トモナル等ナリ

義務ト品格トノ関係

本務ト品格トノ関係ハ因ト果トノ如ク又果ト因トノ如シ、
ソハ本務ヲ完シテ先ニ理想我ナリシ幾部分カ已ニ現在ノ
我トナラハ先ノ本務ハ今日ノ我ニ対シテハ本務タラザル
ナリ、コレ或本務ヲ実シテソレタケ品格カ発達セシナ
リ、是レ本務カ原因トナリテ品格ヲ生シタリ然レニ又吾
人ノ理想ハ無限ノモノニシテ一方ヨリ実現セラレツ、モ

次々ニ高尚ナル理想ノ湧キ出テ品格高マレバソノイダケル理想モソレタゲ進ムモノナリ從テコノヨリ高キ理想我ハ更ニ現在の自我ニ対シテ法則ヲ課スルニ至ル即本務ヲ生ズコレ品格ヨリ本務ヲ生シタリトモ言ヒ得ルナリ

〔資料2〕

(表紙)

第三回家政三年

実践倫理

実践倫理答案

家政三年

平塚 明

知識上ノ不調和二苦シミシハハヤ過去ノ事トナリス、サハレ推理ニヨリテ思想ノ調和ヲ得タル我ハコレノミニテ満足スル能ハザル事久シク感情上ノ衝突ハ我ヲハ裂ニスルノ思アリシモ頃時神ト我ト人ト我トノ和合感ニウタル、事アリテ種々ナル衝突ハ霧散シ去リ大ニ衷ニ力アルヲ感ゼリ而シテ今ヤ以前ノ如ク只知識ヲ追求スルニ吸々トシ然モ空理空論ヲ喜ブモノニ非ズ寧ロ宗教的的情感味ヲ求ムルモノ、高潔ナル情感ノ濃厚ニ感発シ来ラン事ヲ望

ムモノナリ」

病有リテ久シク欠席セシヲ以テ級又ハ三部ノ状態ニ就テ知ル事明ナラザレハ何モ記サズ」

〔資料3〕

(表紙なし)

(他筆にて)

注意

家政三年

平塚 明

我が団体ノ特色効果等ニツキ謂ハントスルニ当リテ我ハ実ニ之ニツキテ一言半句モ云フ資格アラサルヲ深ク感スルナリ

ソハ過去三年間我カ団体ト交渉スル所殆トアラザリシナリ我ハ団体ノ一員ニシテ団体ノ為ニ己ヲサ、ゲ盡ス可ギ義務アルヲ知ラザリシニ非ズ社会ト個人トノ関係等ニツキテ知ラザルニ非ズ

知テ是ヲ為サザリシナリ否自カラ求メテ為サドルニ団体ノアウトラインノ辺リニ我身ヲ置カント努メタルナリ、何故ニカクノ如ク行ヒ来リシカソレニハ理由ナキニアラザルズ、

我迷悶ノ中ニアリテ自己脚下ノ大問題ノ為ニ全心全力ヲ奪ハレ他ヲ見ルノ余有ナカリシ事モ確ナリ又自己ノ存在サハ認ラレズ又我標準タルベキモノヲ主觀ニ求ムベキカハタ客觀ニ求ムベキカヲモ見出ス能ハザリシモノナレバ如何ニシテ団体ノ為他ノ為ニナサントスル力ノ出テ来ルベキ源アラザリシナリ

又我ハ団体ノ思想傾向ト己レト到底一致シ難キヲ覺エタリ友ガ満足シツ、アルモノモ我ハ満足シ得ザルナリ故ニ我胸中ノ疑問ヲ団体ニ向テ其解決ヲ求ムルモ不可能ナリ心通セザルフシ多ク却テ誤解ヲマネキ級ヲ乱シ人ニモ害ヲ及ボサントノ事ヲ怕レタレバ退テ只自己ノ力ニノミ求メテ己レヲ救ハントセリ

次ニ我心ヲイタマシムルハ其ダークサイト我眼ニ映スル時ナリ、尚其頼ミ難キヲ感シ殆ト何ノ意味ナルヤワカラザル時アリ我ハ之ヲ感シテ慨嘆シツ、モ纏テ自己ヲ見レバ亦力ナキモノ一点ノ透過スベキ自覺ナキヲ知りテハ如何トモナス能ハズ苦シサヲ増スノミ只黙々トシテ過キ来レリ

斯クノ如クシテ無責任ニモ三年ノ星霜ヲ保来リ団体トシテノ活動ニ殆ト関セザリシ身ニシテ今団体ニツキ彼レ是レノ詞ヲナスハ我罪ヲ更ニ加フルノ心地スレトモ只一言今日ノ我団体ニツキ感シツ、アルコトハ到底現今ノ如キ

有様ニテハ力アルモノトシテ永続セザル可シトノ事ナリ形式タケハ必ス保タルベケレモ生命アリ發達止マサル団体トシテ保タンニハ今後我々力大ニ奮發一番決心セザル可カラズト感ス、

過キシ日我ハ小ナル自得ヲ了シテヨリ過去ノ我迷路ノ軋々タリシヲ追想シ慙愧ニ堪ヘザルナリコ、ニ我ハ団体ニ対シテモ実ニ無責任ニ且桜楓会ニ対シテモ冷淡ニシテ前後四回ノ外出席シタル事アラザルヲ悔ヒ一切ノ罪我心内ニアリシヲ自白シ以後スルノミ、団体ニ就テハ多ク語ルヲ得ザルナリ

〈資料4〉

(表紙なし)

家政三年

平塚 明

第一問題ニ就テノ答案 ※(自分ハ果シテ卒業シ得ベキカ) 我ハ今ヤ校門ヲ出テントスルニ当リ過去三年間ノ我ヲ思ヒ我心頭ノ迷悶ノ深カクシヲ軋々感セザルヲ得ス、 實ニ三年間ハ迷ヘル時代ナリキカ、リケレバ我ハコノ三年間ニ於テ生涯ノ我事業ニ必要ナル学力知識ノ準備ヲナス事少シモ出来サリシヲヨク知レリ、又品性ノ点

ニ於テモ実ニ足ラサルヲヨク自覺セリ

只我ハ頃日我生涯ノ力ヲ提ケテ我コノ三年間苦メル問題ノ解決ニ努力シ十日間ノ寢食ヲ忘レテ心ヲ集注セシ結果ハ少シク自悟自得スル所アリ人ヨリ伝授セラレシ識ニアラズ自カラ産ミ出シタル自覺ヲ得タリ見性ヲナシ得タリ

カクテトミニ我境界カ変シテ力ヲ感スルヲ得タリ今日迄ハ我為ス所総テ消極的ナリシモ今後ハ少シハ積極的ニ自己ノ存在ヲ認テ信スル所ヲナスヲウヘシト思ヒ数年味ハサリシ快感ヲ得タルナリ、我ハコノ境界ニ入り我過去ヲ今更ノ如ク思ヒ実ニ我大学ニ修学セルコノ三年ハ只空華ト幻妄ニ我本性ヲ閉塞セラレ居タルヲ知レリ然レドモコレト同時ニカレカ又我生涯ノトリ我天職ニ對スル感ヲ一層深奧ナラシメタル非常ナル經驗ヲ得サシメタルモノナリト信ネヲ知レリ

實ニ三年間ノ苦悶ノ經驗我天職ヲ信セシメタリ

我ハ斯クノ如クナリシヲ以テ三年間ウケタル教育ニヨリ決シテ我生涯ノ事業ノ準備ハ更ニ出来居サルナリ我ハ今日ヨリ新ニ其準備ニ着手セントスルモノナリ

而シテ今後ノ十五年ヲコレニアツル覚悟ナリニシテ如何ナル準備ヲナスヘキカノ立案モ成レリ然レニコレヲ実行セシニハ詢ニ云フベカラサル困難多クシテ実ニ慘憺タルモノアルハ明白ナルモ我ハ十日間ノ靜坐中大死

以テ之ヲ決心シテヨリハ心配ハ氷解シ唯我信スルモノヲ正宗ノ名刀ヲフリカサシテ猛進スルヨリ外ナシ我心ハ單純無難ナリ

第二問題 ※（決心ヲ持續セル方法）

一、今日ノ決心ハ必ス永続セララルヘキヲ信シテ疑ハズコレヲ唯一ノ生命トセルモノ―如何ニシテ中レト離ル、事ヲ得ンヤ、

我ハ小ナレドモ兎ニ角何物ニモ動カサレサル確信ヲ得タリ

最モ確ニ最モ明ニ寸毫モ疑フ余地ナキモノヲ見タリ、以後コノ道ニヨリテツキザル力ヲ得コレヲ以テ人生奮闘シ行カルベシト信ス

ソノ道トハ何ソヤ、我ハ今日ナシツ、アル内觀工夫ニヨリ我心力ヲ練ルト共ニ一方ハ研究ナリ思考也（宗教、哲学、文学）思想界ノ客觀的研究ナリ、コノ研究、我生涯ヲ貫キテナサントスル所ナリ

コハ他ヨリセシメラレテスルモノニ非ス全く自己過去ノ經歷上止ムニヤマレサル要求ヨリ必然ニ出デシモノニシテ境遇ニヨリ動カサル、事ナク又カ、ルコトヲナスニ必要ナル境遇ヲコレヨリ開拓シ行カントス、

又卒業後ハ我修学費タケ自給セントスルモノナレバ其必要上ヨリ職業ニツカザルベカラサル事モアリ征テ実

實際上ノ經驗モ多少コ、ヨリ得ラル、ナルベク、我ハ卒業後ハ過去ノ三年間ノ冥々蒙々ナル生活トハコトナリコ、ニ小ケレトモ自己アルヲ認メ我天職ヲ厚ク信シスルヲ得タルナレバ今後ハ大ニ我生活ニ改ムル所アルヘク多忙タル奮闘ノ生活ヲ開カントス

第三問題

我小今懺悔ノ情ニ堪ヘサルナリ、ソハ我小団体ニツキオコトニ一言半句モ去テ資格ナキヲ感ズレバナリ

※（他の答案より引用）



『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかつた新資料を順次発表する。今回は講話一編である。式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話

1

大学部全体の御話 — 明治四十四年五月三十一日 —

此の頃、関西地方に旅行を致し暫く皆さんと会しませんでした。近々今一度、一週間程また留守をあけなければならなくなつたので、此の第十一年目の第一学年の大切な時に於て屢々留守になり、殊に一年、予科等の丁

度今、学校の主義を能くわかつて、将来の方針を定めなければならぬ大切な期に於て、受持の実践倫理を欠くことは大に気がかりに思ふのである。

過去十年間一度も、此の度のように外に出たことはな

かったが、此の度、斯様な事を試みたのは、一つは外部の運動をよくしいたいと思つたのと、一つは内部には最早自動的の校風が出来、指導者の経験も出来た所から、私が暫く居なくても差支へないと思ふたのである。

それで此の前に、あなた方で自動的に研究をなさる様に申して置いたのであるが、私の希望に近い様な方法で、あなた方の満足して出来る様に書いたもので報告をなさり、又此の前の水曜に直接、口でよくわかる様に御発表なさつたのであるから、多分皆さんよくおわかりになつた事と思ふ。

そこで今日は、あなた方がお調べになつた総ての事に対して、総ぐくりをしなければなりません。其の纏めたのが、丁度此の学年の方針を定めるに必要であり、又それに答へることは一年及び予科の問題として居ることに適當なる故に、時間の經濟の為、又問題が一つになつて居る為に、土曜日の代りに今日一緒にすることになつたのである。一年、予科には今一回土曜日にしなさいと思ふたが、少しそれは出来にくいよーだから一緒にしたわけである。

明日と明後日と時をあけて、新らしく入学した方々に面会し、答案と本人とをよく知り、問題があれば適切に答へて、銘々の事情を明らかにしたいと思ふのである。

今日は三年、二年に結論を致すのであるが、成る可く一年の問題にも答へるよーに致しますから、時には一年にむづかしく、二年、三年には少し不必要なこともあるが、双方とも注意なさつて御聞きになり、猶わからぬ所は組で互に補ふ様に致せば、銘々の目的が達せらると思ふから、其のことにつき今の時間を使ひたいのである。

国力増進の第一原動力は智力である

之れは、此の頃、内務省から出たものでありますが、世界の主なる国々の国力を比較したものであります。国力を増進する所の第一の原動力は、智力である。私が此の一月に出したものによれば、發明、発見と云ふ様な力に於て、我が国は米国の1/100である。確信とか信用とか云ふ内部の力はどーかと云ふと、やはり Anglo-Saxon が第一位を占めて居る。故に、我が国が一等国になつたとか何とか言つても、名だけでは仕方がない。やはり實際の力を養はねばならぬと云ふことは、誰れが考へてもわかることでありましょー。

過日來、あなた方が自動的にお調べになる様に申したのは、何の為でありましょーか。

教育問題の内面は Genius の発揚である

教育問題を定めるに、二方面ある。其の内面は Genius の発揚である。先づ教育について、どーしてもわからなければならぬものは、個人の中にある Genus の発揚である。

Genius は造らるるものにあらず生れたるもので、一朝一夕に成れるものではない。数万年間に蓄積せられたものである。故に、教育の一方面は個人にある。今後、己が目的を定むるに最も必要なものは、自分の中にある力を見出す事である。

外面は四囲の境遇である

教育の外面は四囲の境遇である。

今後の教育は、文部省が定める制度、学校だけで出来るものでない。其の境遇と云ふものは誠に広く、学校のみならず宗教、政治、商業、工業等あらゆる人間の活動、思想、感情、制度は、悉く此の今後の教育に関係あるものである。故に、今後の境遇を解しなければ教育をすることが出来ない。然るに今後、男女に拘らず、人生に必要な我々の思想、感情、知識、経済界、工業、職業、

家庭が如何なる変化を受くるかと云ふに、益々世界的の関係になるのである。婦人の職業、位置、本務が皆世界的関係となり、其の関係から皆、今後の各自の生活に影響を被るのである。故に境遇の如何が、今後の教育の変化、又それに伴ふ覚悟を定むることによってわかる。今後二十年の万国の均衡、実力の発展を比較したのは、将来の教育の境遇を定める必要があったからである。天賦性をもとし、同時に教育は広い四囲の境遇から出来るもので、学校ばかりでない。従つて婦人と雖も、国、世間、社会の関係を知らなければならぬ。国民を教育する境遇は、益々拡大して来るのである。

過日来、皆さんに問題を出したのは、其の教育の最も重なる要素となる所に着眼し、根本を養ふと云ふ所に力を注がんとすることを氣づかせる為である。

次に、今後の教育は如何になるべきかと云ふことを研究する為である。

現今の教育は過去を重視する傾きがある

只今、我が教育界を支配せる力は、我が国の教育の過去で、過去の教育を重視する傾きを存するのである。余り現在の制度、習慣、風俗、現在の学説、教授法にとら

はれて居る、行き悩んで居るのである。第二の發展をせんとならば我が国の婦人を覚醒せしめ、我々将来の教育、明日の教育が、今後の教育が如何になる可きかを知らなければならぬ。

人間は、将来を見る先見の明がなければ進むことはいないのである。又、人間の最も高尚なる命である目的を追求し、理想を熱望する熱心、又は精神Geniusと云ふ勢力の集注、又は幾万年養ひ来つた精力を發揮して、新しい人格を發現せんとする雄大なる力を發揮することが出来ないものである。然るに、今日の教育は現実に囚はれ、将来に思ひ至ると云ふことが欠けて居る。こゝを真に心づく様にさせるのが、一つの目的である。

明日の教育は凡て過去の制度から解放しなければならぬ

紐育のWorld Workと云ふ雑誌におきまして、此の間、広く世界の教育者に徴して、明日の教育を尋ねたのである。即ち、将来の教育は如何になる可きかと云ふことを尋ねたのである。有力なる教育家、学者、母等、凡そ三百人答へたが、異口同音に或る一点に議決したのである。其の大意は次のよゝである。

今後の教育は現在の教授法、教育学の学説、その云ふものについての教義の束縛から大部分解放せられねばならぬ。

つまり今日の試験制度などから解放せられねばならぬ。英米の教育家の中にすら、猶此の教授法や試験制度等によつて、如何に束縛せられて居るかがわかる。殊に我が国の授業時間の多いことは、英米の人が見て驚くのである。其の証拠には、一番あらはれねばならぬ所の發明や發見が少しも出来ぬ。之れによつてもわかるのである。之によつて、如何に展びよとする所の力を妨げられて居るかも知れぬ。故に明日の教育は、此の束縛から解放すると云ふことにあるのです。此の学校に対してもいろいろ批難がありました。此の頃、卒業生に対しての評判がよくなつた。併し未だ中々、我が国に於ては批難の声が多いのである。之れは何故かと云ふと、学校の試験を受けたとか、卒業証書を授けられたとか云ふことを以て、教育を受けたと思ふからである。之れは未だほんとの教育を受けて居ないのみならず、束縛せられて居るのであります。然らば、ほんとの教育はどゝして受けられるものであるかと云ふ、其のほんとの意味をあなた方にわかる様にしよと云ふことが、又一つの考へであります。

夫れで先づ過日來、我々が研究して到達しよーと思うた要点は、第一、教育と云ふものは、銘々の中に与へられてある天賦性を發揚すると云ふことである。

第二は、其の天賦性がほんとーに發現すると云ふことは、四圍の境遇によらんければならぬ。四圍の境遇に順応し、境遇を動かすと云ふことでなければならぬ。其の教育は、現在と將來とに重きをおかねばならぬ。

第三には、今後の教育はどーなるべきであるかと云ふことを定める為である。即ち教育の目的、教育の主義、方針を明らかにする為である。

第四には、今後の教育は女子教育と児童の教育と云ふことに、今日迄よりも以上に重きをおかねばならぬと云ふことである。

第五には、其の目的を達するには女子の高等教育、即ち大学教育を出来るだけ拡張しなければならぬと云ふことをきめる為である。

此の意義を明らかに致しませんと、今後の教育の方針がきまらないのである。今後の教育の方針がきまりかねると、あなた方銘々の天職を自覚して、其の目的を達することが六かしいのである。夫れで、過日來の材料を使つてお考へになれば、そー疑問は起らないであるーと思ふけれども、もー一つ残つて居るのは、如何なる範圍に

於て受く可きものかと云ふことがわからないであろー。併し今後の教育と云ふことがわかつたならば、今後の女子教育は如何にあらねばならぬか、女子高等教育が如何に必要なものであるかと云ふことがわかつて来るのであります。

女子高等教育の必要

夫れで私は、女子の大学教育とはどー云ふことを意味するのであるかと云ふことの要点を、初めに申しておくことが必要であると思ふ。女子高等教育の必要と云ふことは、学科目の多少、又は学問の程度、或は専門の種類と云ふよーなこと、之れを具体的に言へば、今我が国の帝国大学に教授して居ります学問の組織、其の学科目の程度と云ふ一つの標準を立て、其の標準に丁度相当する様にして行く、又帝国大学に行ふて居る試験を通過して学位を受ける、其の目的に叶ふ様な学問をすることが女子を高めること、女子の高等教育であると云ふ風に言ふ人があるけれども、そーではない。高等教育と云ふことが決して、其の試験を通過するか学位を得るとか云ふことではない。学位を貰つて居る人の中に、未だほんとの教育を受けて居ない無学な者が沢山ある。

女子を教育するには制限を打破しなければならぬ

然らば、ほんとの高等教育とはどう云ふことであるかと云ふと、第一に、我々は女子の發展に制限を加へないこと云ふこと。譬へば、今日女子の問題として、女子は高等女学校で充分である、或は女子の教育は十八歳で出来上るものであると云ふ制限を打破したいのである。何とならば、女子も人間である故に、永久展びると云ふことは命である。其の命に制限を加へ、命の發展を止めたならば展びないのである。故に、年限を以て女子の發達を限るのは間違ひである。夫れを私共は破つて行かうと云ふのである。

之れが即ち Higher education である。又境遇によつて限らないのである。つまり高等教育と云ふものは、与へられてある天賦性、即ち銘々の中にある真価値を發現するのである。之れを具体的に言へば、も少し女子の健康を増進し、女子の人格を拡大し、女子の生活を幸福にし、女子の中にある精神的要求を満足させよ、つまり、も少し女子の自覚を明らかにし、其の意識を増進せしめ様と云ふのが、女子の高等教育であります。夫れで昔から此の教育の意義とか目的とか云ふことを多くの学者、教育家が論定しよと試みましたが、併し夫れは何時まで

も成長、發達するもので、未だ一定の形にはさまらないのである。併し其の要素には、不変の真理がある。そこで、女子の中にある不変の真価を実現すると云ふことを具体的に要素をわけて申すならば、其の目的がおわかりなるかと思ふ。

女子高等教育の目的

1 健康の増進

極簡短なもの、土台になるものから申せば、高等教育の目的は、

第一、銘々の健康を増進し、其の健康を永久に保存して止まないと云ふ所にあるのです。此の健康と云ふのが、我々の身体の真価値である。どうしても身体を持つて居る以上は、健康がなければ実は価値がないのである。併し健康は身体の価値であるのみならず、我々の内にある自我の価値である。此の健康はやはり我々の価値であつて、始終増進し、始終發達することが出来ねばならぬ。夫れを保つには高等教育を受けねばならぬ。即ち感情に於て、思想に於て、始終發達する所があつて始めて健康は増進するのである。又、人間は若返ることが出来、長命することが出来るのである。

2 健康に伴ふ美

そして、健康に伴ふ所のも一つの価値は美であつて、其の美を發揮することが出来るのが、又一つの教育の目的である。真の美を益々發揮し、其の美が永久に保たれる様にすることが大切である。

昔の Greek の教育の目的は、美であつた。道德の目的も、美であつた。そこで、体育を奨励して、全体を最もよく發育せしむると云ふことが Greek の教育の目的であつた。故に Greek の美は、主として人間の健康から發する処のものであつた。只の裝飾ではなかつた。故に手にも足にも、身体の全部に渡つて居つたので、真の健康から現れる処の美を一番に尊んだものであります。夫れで、其の理想を或は彫刻に、又其の他の美術に描いて、Greek 人は朝に夕に夫れを思ひ、夫れを慕うて養生したのである。之れが Greek の文明の本をなしたのであります。故に私共は今日もやはり、此の健康から現れる処の美と云ふものが、婦人の価値であると思ふ。

然るに、今日の傾きはドーかと云ふと、やはり裝飾に偏する、外からものをくつつけて綺麗に見せよとする。夫れで婦人の誇つて居る美、又人から尊敬せらるる美は、虚である。うそである。直にはげて了うのであります。

夫れで、あなた方は其の虚をのけて了つて、真の健康を増進し、年をとらない様にし、其所から出る所の眞価を發揮することが必要であります。

そして此の美と云ふことは健康からも来ますが、一つは精神状態からも来るのである。故に、いつも立派な精神状態を保つには、教育と云ふものが年限を限られてはならぬのであります。

3 自覚

次には、意識の範圍を拡大し、意識の力を益々強く且つ深くし、意識の關係を益々複雑に進めて行くことと云ふことです。之れを、あなた方が普通に使つて居らる、詞で言へば、自覚を得ると云ふことも言へる。つまり私共の生活は無意識から始まつて、Sub-consciousness 潜在意識、或は本能とか衝動とか言つて、我々に与へられてある力の芽が深く潜んで居る。

自覚の要素

1 弁別力

之れが意識世界に發現して來ること、即ち意識が醒め

て来て、意識の力が増進し、其の範囲が拡大せられて来ることであります。意識の増進するとは、弁別力の発達することである。其の最初のものは自我意識で、自分と人との区別がわかつて来るのである。其の弁別力の一番高潮に達したものが、価値の鑑定力である。善悪、正邪の区別、醜美の区別と云ふ様なもので、善悪を区別する力を良心と言ひ、之れの間からぬものを愚鈍と言ふのである。正邪の判断も出来ず、行ひの標準もわからぬ様な人は、意識の最も弱いものである。

自分の価値を知る者は修養の道を知る

私共には非常な力を持つて居るものである、自分には価値があり、自分の活動力、天賦性があると云ふことを見出すことが出来ると、其の人は誠に満足することが出来る。けれども其の弁別の出来ない人は、少しも自分の価値を知らぬ人がある。自分の欠点を知る者は、必ず其の修養の道を知る人である。自分の価値を知る人は、必ず人の価値を見出すのである。自分の価値を知り、人の価値を見出す程、満足なことはない。是れによつて益々熱心になることが出来る。此の力を生涯かゝつて、益々発達することの出来る様に養つて行く。之れが即ち高等

教育であります。

2 活動

次は活動、即ち働きである。此の弁識力が出来る、即ち智力が出来て自分を知り、人を知り、価値を知る。そして其の価値を現さうとし、自分を実現しようとする。此に於て活動が起る。そして益々正確なる、丁度目的に叶ふ様に出来る様に、之れが、活動の出来ること価値を知るのである。複雑になつて行く活動が互に共働して行き、活動を盛んならしめ複雑にして行くのである。それが意識の増進と云ふことである。

3 目的の構成

次には、目的を構成するのである。理想を意識するのである。即ち、将来に希望を属し、目的を追求する処の意識が進んで行くのであります。之れが、意識の第三種に数へるのである。

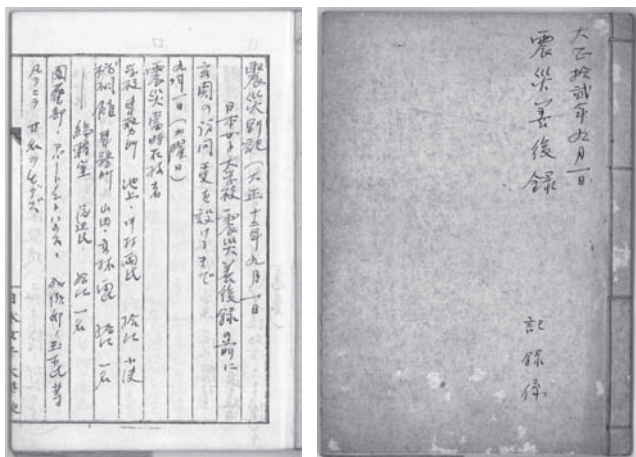
4 改善、進歩

次は改善、進歩。つまり、英語で *Motify* と言ふ処の力である。人間は現状に満足をしない。現実に安んじない。必ず、是れ迄ある処の習慣を改めよと云ふ心がある。今の境遇を、も少し理想的にかへよとする考へがある。即ち、一日も同じことを繰り返しては満足しないのである。銘々にある処の習慣、遺伝、風俗、是れ等のものを改めて行く。改める為に、努力、抵抗する所の力がある。其の為に益々、我々の意識を明らかにする。一旦意識に上った所の力は一時消える様に見えるけれども、潜在意識の中に永久に残つて、やはり意識の要素をなすのであります。此の働きを総称して、或は自覚など言ふ。

婦人は自覚して初めて尊いものである

婦人が自覚したならば、初めて婦人も尊いものである。婦人も大切な天職を帯びたものである。永久すたらない処の尊いものを持つて居るものである。今の現実の困難、現実の醜は悉く除き得らるゝもの、現実の困難には悉く勝つて行くことが出来、充分満足の出来るもの、幸福な経験の得らるゝものであると云ふことを見出だし、

此に始めて自重心が出来、一種言ふ可からざる、何物も奪うことの出来ない、何物も隠すことの出来ないものが起つて来る。あゝ嬉しい、満足な、と云ふものが内に生じて来る。そこで社会を感化したり、賢母良妻となることが出来る。其の意識を自分の中に生じて来るのが高等の教育で、之れが出来て初めて満足することが出来る。そこで始めて婦人を救ひ、婦人を高めることが出来る。夫れを高等教育と言ふのであります。どーか、あなた方は、ほんとの女子の教育と云ふものをお悟りになつて、ほんとの教育をお受けになることを希望致します。



成瀬記念館の収蔵資料の中から未発表のものを順次紹介する。今回は「大正拾貳年九月一日 震災善後録 記録係」一冊である。縦二三・八cm×横一六・七cm、和綴じ、「日本女子大学校」罫紙使用、袋とじ全三四頁、厚紙の表紙が付く。記述は一九二三（大正一二）年九月一日から二〇日まで。同様の体裁で「大正十二年九月一日 震災以後ノ記録 編輯部」一冊が残されている。

大正拾貳年九月一日 震災善後録 記録係

〔表紙〕

大正拾貳年九月一日
震災善後録
記録係

震災別記（大正十二年九月一日）
日本女子大学校震災善後録の前に
玄関の訪問受を設けるまで
九月一日（土曜日）

震災当時在校者

学校事務所 池上・中村両氏 給仕 小使

桜楓館事務所 山田・高林両氏 給仕一名

—— 編輯室 渡辺氏 給仕一名

園芸部・アパートメントハウス・成瀬邸ノ玉木氏等

凡テニテ廿名ヲ出デズ

当日来校者 渡辺教授 (三越ニテ開催ノ柳氏展覧

会ヨリノ帰途直ニ)

江口氏

夜 仁科氏代理仁科武雄 山本氏

二日 (日曜日)

井上雅二氏来訪

夜十一時 麻生校長 瀬野 安東両氏隨行シテ軽井沢ヨ

リ帰校 (川口駅ヨリ徒歩ニテ) 直ニ校内ヲ巡視シ最寄教

職員ヲ召集シテ応急善後処分ニツキテ協議アリ

三日 (月曜日)

早朝最寄教職員桜楓会役員參集

麻生校長指揮ノ下ニ昨夜ヨリ引続キテ善後処分ニツキテ

協議。先ツ開校延期ノ通知ヲ騰写刷ニシテ各通学学生ニ

通達ス (市・及市附近) 汽車便ニテ發送ノ手筈トシ及ビ

他府県下ニ目下帰省中ノ学生ニハ軽井沢三泉寮ニテ宛名
ヲ記入シテ発信ス

三泉寮々生ノ処置ニツイテ明日安藤氏出向ト決定

本日軍隊警備ヲ願出ス。直ニ周囲警備並ニ校内巡警ヲ

(二二回) 受ケル

今夕ヨリ専任教師 (男子) ニテ夜警ノ手別ヲスル

園芸部ノ永井・押田両名・講義録編輯所ノ為井氏モ之レ

ニ加ハリテ夜警の一部ヲ分掌

本日ヨリ校舎正面玄関ニ受付ヲ設ケ校長以下教職員・桜

楓会役員出勤見舞来訪者・避難者に接待ス

四日 (火曜日)

洪沢子爵来訪 学校ノ被害状況ヲ巡視シテ行カル

本日塘幹事ノ安否ヲ訪フ為溝口氏湯河原ヘ向テ出発

玄関日直及夜警前夜ノ人々ニテ継続ス

五日 (水曜日)

教職員桜楓会役員漸次揃フ。八月上旬ヨリ北海道方面ヘ

旅行中ノ井上教授・出野氏帰校。

六日 (木曜日)

七日(金曜日) 晴

卒業生及学生の避難ヲ要スル方々ニ母校へ避難シ得ルコトヲ東京日々新聞ニ広告掲載ヲ申込ム

桜楓会員へ母校及桜楓会ノ現状ヲ通信スベキ方法ニツキテ協議。

一、家庭週報 二、葉書だよりヲ以テ

中央郵便局へ第三種郵便物取扱開始ノ豫定期ヲ問合ハス。多分一週間後開始トノ事ユエ第一回ハハガキだよりニスル

日々新聞へ掲載ノ広告文

『卒業生及学生の避難を要する方はお出で下さい』

日本女子大学校

桜 楓 会

連名

本日来訪者・夜警当番別記

八日(土曜日)

日々新聞に掲載ノ広告文ニその御家族の文字ヲ追加スル為同社へ訂正原稿ヲ持参セシム

桜楓会員宛(地方)ハガキだより原稿作成ニ千枚を騰写に刷ル。午前中其ノ一部ヲ発送 午後全部発送済。週報

購読者ニモ追加騰写シテ発送スル運ビトス

校内ノ震災状態ヲ写真ニトル。講堂(四葉) 家政館(一葉) 警備隊(一葉) 計六枚撮影

今夕ヨリ学校玄関ニ電燈(市電) 初メテツク。

九日(日曜日)

校内警備ノ駐屯兵士交代 従前ノ七名ハ四名ニ減ジタレド今日ヨリ更ニ戦時状態ニ入り校外ハ益々厳密ノ警備トナル

震災記録帳ニ帳ヲ綴ル(一、震災善後事務記録 一、編輯部記録) コノ外ニ

(イ) 来訪者名簿

(ロ) 罹災者名簿

(ハ) 罹災者調査名簿

塘幹事御遭難アラセラレシ各宮家へ御見舞ニ参伺

十日(月曜日) 雨

日々新聞ノ外ニ今日ヨリ左記ノ新聞入手
萬朝報・報知・大阪時事新報

会津喜多方仏教青年団員十二名来校 慰問品ノ寄贈(寄贈物品目録別記) 及滞留中ノ夜警を分担サル。

日直当番ノ時間ヲ夜ノ十二時迄トス。場所玄関

学校開校期豫定ヲ山手方面各所ニ揭示(馬場氏使)
塘幹事市内在住ノ学校評議員諸氏ノ震災見舞ニ出向カル。
本日来訪者芳名別記録

震災善後臨時事務分掌ノ相談アリ、各員ノ役割ヲ決メル。
(騰写ニ廻ス)

十一日(火曜日) 晴れ

震災善後臨時事務分掌役割刷物配布

警備ノ場所及日直日割、二学期始業予定ヲ付ス(刷物別
綴)

午後井上氏來校桜楓会ノ救護事業方法ニ就テ役員及會員
諸氏ト相談会ヲ開ク。取敢エズ被服救護部ヲ設ケ最寄會
員諸氏に衣服布地ノ寄贈及ビ裁縫ノ手伝依頼ノ通知ヲ発
ス

午後五時半頃避難者二名來着 明日出直シテ來ルコトト
シ大塚ノ避難所ニ帰ル
佐藤清蔵氏(瀨野氏親籍) 來校見舞ハル 慰問品ヲ戴ク。

本日朝日新聞号外入手

十二日(水曜日) 晴れ。午後六時前後可成りの震動ヲ感
ズ。

今朝五時會津仏教青年團(夜警勤務後) 引上六時半池袋
停車場ヨリ帰郷ノ途ニ向ハル。

今夕ヨリノ夜警旧ニ復ス。(当番別記)

読売新聞本日ヨリ配達。

週報部ヨリ山本氏本所方面ノ災害視察ニ出向 渡辺氏及

仁科武雄同行

午後井上教授出校ノ上 桜楓会トシテ罹災者救護方法ニ
ツキテ協議アリ。明日ヨリ学生(輕井沢三泉寮在寮者ノ
家族ニテ東京市内在住者ヲ手初メニシテ桜楓會員罹災者
ノ現状調査ヲ始ムル事ニ相談成ル

午後

村川堅固博士來訪。豊川町自警團ノ意ヲ齎ラシテノ交渉
アリ 麻生校長 井上教授ト打合ノ上辞去サル。

府教育課ヨリ「 空白 「氏來校 学校ノ災害ヲ調
査。

午後五時頃、豊明寮裏手ニ出火ノ報アリ 大ニ警戒ス。
須臾ニシテ鎮火ス。

來訪者別記録。

本日ノ日直・夜警別記。

十三日(木曜日) 午前十時頃驟雨アリ後晴 午後四時頃ヨリ曇

今朝ヨリ本校舎(高等女学校々舎) 玄関上ノ屋根修繕ヲ始ム 瓦払ヒノ音スサマジク玄関ノ受付ハ地震當時サナガラニ雑然騒然ヲ極ム。

午後 麻生校長 河野主事 本所方面ノ罹災地視察ニ出向カル 麻生校長令息・塘幹事令息同行

本日ヨリ本所・浅草・下谷方面ノ会員及学生家族ノ罹災状態調査ニカ、ル(馬場氏出向)

井上教授 罹災者救済方法ニツキテ昨日ニ引続キ打合せノ為 帝国大病院分院へ出向カル。上代氏同行。

東京市学務課・霊岸小学校社会部ヨリ同上罹災者救済ニツキテ桜楓会へ交渉アリ 右ニツキ桜楓会員ハ相談ノ結果 各自不用衣類ヲ持寄リテ裁縫調製シ罹災者へ寄贈ス

ベク用意ス(最寄会員及教職員方へ伝言又ハ騰写刷ヲ以テ通知ス)

本日ノ日直・夜警別記。来訪者同上。

十四日(金曜日) 驟雨模様 蒸暑ク雨又晴 午後三時過震動アリ

午前国民新聞記者来訪。桜楓会ノ救護活動ニツキテ問合セアリ

午後・高田市越後新聞記者来訪 学校ノ消息ヲ地方へ伝

ヘントテ震災状態ヲ聞取りテ行ク

本日午後 桜楓会役員(出席者) 集合シテ臨時救護事務ノ具体案ヲ協議シ取敢エズ衣服部ヲ開始シテ寄贈品蒐集及其ノ手入ニ取りカ、ル(コノ仕事手伝ヒノ為ノ出席者別名簿記入)

尚コノ寄贈品蒐集方法トシテ左ノ刷物ヲ騰写刷トシテ配布ス。尚同様ビラヲ書キ要所ニ貼付ス

「罹災者ノ為ニ衣類・切地・綿・手拭・タオル・毛線類・其他御不用ノ品何デモ御寄贈ヲ願ヒマス

小石川区目白台日本女子大学校 桜楓会臨時救護事務所衣服部」

「欄外に」ビラ貼付ノ場所 早稲田、大塚、池袋、学校正門前、鬼子母神、病院前

本日ノ日直・来訪者・夜警ハ別記

十五日(土曜日) 雨(驟雨屢々来ル) 風アリ

三泉寮々生前島たか子氏兄 小林愛子氏母来校 目下輕井沢滞在中ノ前記二氏ヲ伴ヒ帰ランカト突然ニ交渉シ参リタルモノアリトノ事ニテ眞否ヲ匡サル。学校ニテモ疑問トスル点アリ 直に輕井沢へ コレニ対シテノ注意ヲスル為ニ先ツ安井氏浦和に出向シテ打電又藤原氏ハ前島

たか子氏兄上下同行 榎井沢へ急行。

此ノ外 夜警・来訪者氏名別記

本日 清水組技師工学士海野洗太郎氏来校 震災校舎巡視・講堂（教育館）及家政館ノ二棟ハ修繕ノ見込ナシトノ見立ナリ兩棟ノ死ノ宣告ヲ受ケタルモノナリ

桜楓会ヨリ井上氏出野氏丸山氏ハ市社会局へ救護事業ノ打合せニ出向

来訪者及夜警氏名別記

十六日（日曜日）

午後一時 警備隊中隊本部学校内金山ニ駐屯ノコト、ナル。晚香寮・豊明寮ヲ之レニアツ
一個小隊（廿八人）駐屯。炊事 学校ニテ引受ケル

桜楓会臨時救護事務交渉ノ為 井上氏出野氏上代氏ト記録係ヨリ一名加ハリテ市社会局及深川区役所へ出向調査

文部省社会教育課 原忠管氏来訪

榎井沢ヨリ上坂 小山 御供氏婦京 来校、別二三泉寮生三名帰京、昨日ノ疑問トセシコト稍解セラル

十七日（月曜日）晴、朝微動アリ

桜楓会救護部 市ノ社会局ノ人々ト深川方面ノ救済調査ノ為出動 交渉ノ結果 コノ方面ハ市ノ手ニテ既ニ充タサレ居ルコトヲ調査シテ結局 上野小松宮銅像前二市社会局ト日本女子大学校及桜楓会ト合併シ児童救護所開設（天幕ヲ張りテ）ノコトニ決ス。桜楓会員ノ出張可能ノ人員ヲ叫号シテ各係ヲ定ム（別記）

金山ノ警備本部へ一個小隊加ハル、総員二個小隊七十六人駐屯

今夜ヨリ校内警備ヲ表門及金山ニスル、裏門ヲ省ク（晚香寮ニ警備中隊本部ヲ移サレ金山一帯ノ警備ニ当レルヲ以テナリ）

十八日（火曜日）

上野小松宮銅像前二児童救護部開設準備ノ為ニ要スル物品取集メニ多忙

午後 井上・出野・丸山・上代・記録係一名前記上野へ出向。

市ヨリ衣服材料品着。桜楓会救護部衣服部更ニ活気ヅク。

桜楓会員ノ救護部手伝ノ人続々參集。(名簿別記)

尚罹災区以外ノ学生諸氏ニ手伝依頼ノハガキヲ出ス。

日本橋・浅草方面へ慰問調査ノ為、馬場氏出張。

來訪者・日直・夜警 名簿別記

罹災者ノ名簿ヲ整理シテ記入ス。

十九日(水曜日)

桜楓会児童救護部開設第一日(上野公園 小松宮銅像前)出張者八朝八時上野ニ集合。午後五時帰校。

宮内省御下賜金五百円也 府社会局朝原梅吉氏ヲ以テ伝達サル。(右ハ桜楓会巢鴨託児所へ罹災救助トシテ)。

市ヨリ罹災者救助ノ為ノ古着類ヲ貨物自動車二台ニ満載シテ到着ス(各地方ヨリノ寄贈品)。

罹災区京橋ヲ馬場氏 本郷ヲ仁科武雄氏調査ニ出向。

廿日(木曜日) 午過ぎ小雨

上野ノ児童救護所へ出張、昨日ト同様。帰校午後六時ヲ過グ。内務省社会局ヨリ活動写真撮影ニ來ル。

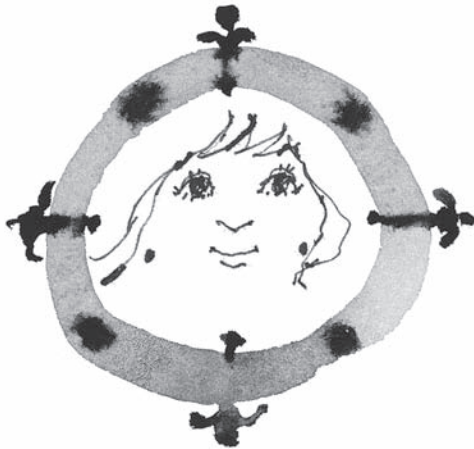
罹災者調査深川方面(馬場氏)

軽井沢ヨリ淀野・野見山両氏及学生五名帰校

金山駐屯ノ兵士俄ニ引上グ 交替ノ為カ。

夜警従前ノ通り金山・裏門・表門ノ三ヶ所ニ設ク。

罹災者調査ハ本日深川方面(馬場氏)
夜警当番・來訪者氏名別掲。



- 12) 『成瀬仁蔵著作集』第3巻にはないが、『家庭週報』第437号（1917年10月12日）にはある。
- 13) *The Builders and Other Poems. op.cit.*, p. 45. なお1913年版詩集では *Lyrics of Labour and Romance* の項に収録。
- 14) *The Poems of Henry van Dyke. op.cit.*, pp. 332. 333
- 15) *ibid.*, p. 341.
- 16) Yaddo という名称は、トラスク夫妻の早世した子どもが、“shadow”をこのように発音していたことに因むという。また、この施設はのちに働く女性のためのセンターとしても活用され、ハンナ・アレントやスメドレーもここに滞在したことがあるという（Wikipedia の Yaddo の項による）。
- 17) 以下の引用は『家庭週報』第567号（1920年6月18日）。
- 18) この詩はのちに加筆修正されてヴァン・ダイクの随想集 *Camp-Fires and Guide-Posts* の第13章 *Interludes on the Koto* に *The Spirit of Japan* と題して収録された。Henry van Dyke, *Camp-Fires and Guide-Posts*. New York: Charles Scribner's Sons, 1921. p. 202.
- 19) *ibid.*, pp. 195-196.
- 20) Tertius Van Dyke, *op.cit.*, p. 363.
- 21) ヴァン・ダイクは日本旅行に因んで、同行した娘を「Little Fuji San」と呼んだという。 *ibid.*, p. 363.
- 22) Henry Van Dyke, *op.cit.*, p. 175. 訳は『家庭週報』第610号（1921年4月22日）による。
- 23) Henry Van Dyke, *op.cit.*, p. 197.
- 24) なお成瀬は、「バンダイクは、もし、吾人が自分の生活を正しく保^{たもた}うと希ふならば、吾人の為す事、行ふ事を学ぶべき四つの事があるといつて居る」（563-564）として、以下の言葉を引用している。これは *The Builders and Other Poems* の *Lyrics of Friendship and Faith* の項に収録されているものである。なお1913年版詩集では *Inscriptions, Greetings, and Epigrams* の項に収録。念のため成瀬訳と共に引用しておく。

第一、混雑を避けて^{めいせつ}明晰（ママ）に考ふる事。

第二、真心を以てわが周囲の人々を愛すること。

第三、行ふには眞実の動機を以て純潔なるべきこと。

第四、神と天とに安心を置く事。

FOUR THINGS

FOUR things a man must learn to do

If he would make his record true:

To think without confusion clearly;

To love his fellow-men sincerely;

To act from honest motives purely;

To trust in God and Heaven securely.

（日本女子大学名誉教授 かたぎり よしお）

黄禍論を批判し、「空間的地球の時間的縮少、西洋の商業的野心と東洋の人口の稠密過多とは既に両者を長い接触の線上に誘つた。目下の問題は世界の平安と真の幸福を増進させるために如何に両者は共に生き、働くべきかといふことである。」²²⁾と記した。さらに、「日本印象記」は結論的に、「英国とアメリカと日本の親密な協力は、我が国が多少の領土と多くの利害を持つ極東の平和と秩序のために、最も重要である。極東のリーダーは日本である。なぜなら日本には中国にないもの、自己統治の本質的能力があるからである。²³⁾」と結ばれた。しかし、その後の歴史は彼の期待を裏切った、と言わねばならない。

ヴァン・ダイクは1933年4月、80歳で、9人の子どもと妻に看取られて亡くなった。晩年、交通事故で妻に先だたれ、視覚障がい者として逝ったナイハルトに比べて、この点でも恵まれた、と言えるであろう²⁴⁾。

- 1) もっともこの詩集 *The Poems of Henry van Dyke* は遺憾ながら、現在行方不明である。図書館に同名の本が蔵されているがこれは1920年版で、成瀬が手にしているものとは異なる。成瀬が手にしているのは1911年版か1913年版のはずである。
- 2) またこれらとは別に、本学図書館にヴァン・ダイクの文章を載せた *Short Stories for English Courses* という本もある。この本には上代タノのサインがある。英文科学生のためのテキストにしようとしたのであろうか。
- 3) ヴァン・ダイクの生涯については彼の死後息子が執筆した *Tertius Van Dyke, Henry Van Dyke: A Biography*. New York: Harper, 1935年が詳しい。
- 4) 1983年の桜楓会成瀬先生研究会軽井沢研修会で、野見山不二名誉教授がこの本について語っている。
- 5) 日本基督教会牧師であった訳者中川景輝は「文豪」ヴァン・ダイクについて「はしがき」で次のように述べている。「ヴァンダイクは既に我国ではかなり知られて居ると思ふ。あの美しい文章に惹きつけられる者は少くないであらう。宗教雑誌の文芸欄には古くから彼の純潔な、優雅な、しかも寓意的な物語が紹介されて居たし、単行本としても「短篇集」や「青い花」が出て居る。」
- 6) *Tertius Van Dyke, op.cit.*, p. 139.
- 7) Edited, with introduction and notes by Henry van Dyke, *Select Essays of Ralph Waldo Emerson*. New York: American Book, 1907. また、電子書籍 kindle で *Encyclopaedia Britannica*. London, 1911 の *Henry van Dyke, Ralph Waldo Emerson — A Short Biography* を入手することができる。ただし *Tertius Van Dyke* の伝記巻末の著作リストにはなぜか、いずれも出てこない。
- 8) *Tertius Van Dyke, op.cit.*, p. 312.
- 9) カッコ内の数字は『成瀬仁蔵著作集』第3巻の該当頁を示す。なお引用に当たっては『家庭週報』によって修正したところがある。この点については前号拙稿の注3を参照されたい。ルビも『家庭週報』による。
- 10) *The Poems of Henry van Dyke*, New York: Charles Scribner's Sons, (New first coll. and rev. with many hitherto unpub.) 1913, p. 31.
- 11) *The Builders and Other Poems*, New York: Charles Scribner's Sons, 1896, pp. 48, 51. なお1913年版詩集では *Inscriptions, Greetings, and Epigrams* の項に収録。

While the Pine cling to the Rock,
The Bamboo bends to the Breeze,
The Cherry glorifies the Spring.
The men and women of Nippon
Will Keep the Yamato Spirit.

松は巖いはほに蹲踞うづくまり、
竹は微風にうなづいてゐる。
桜の花は春の栄光を輝かせ、
日本の男女は永久に大和魂を保つて行く。

ヴァン・ダイクの「女性の光」と題した講演は、女性と男性は同等ではあるが同じではない、と語るものであった。「銀貨のパウンドと金貨のパウンドとはその価値かちは等しい。が、銀貨と金貨とは同じではない」。故に、「男子には男子の務をなすに適した教育を受けさせ女子には女子の務を果すに適した教育を自由にうけさせなければなりません。」と語るものであった。したがって「私は両性は、別々のカレッツジを持たねばならぬと思ひます」と語るヴァン・ダイクの女子教育観は、「人として」の教育を第一に掲げた成瀬の女子教育観には重要な点で異なるのではないか。ヴァン・ダイク自ら「私は旧式のアメリカ人である」と認めるとおり、彼の教育観は成瀬のそれと比べて、キリスト教観と同じく、保守的なものであったと言わざるを得ない。

しかしともあれヴァン・ダイクは日本女子大学のおもてなしに感激した。帰国後雑誌に寄稿した「日本印象記 (*Japonica*)」のなかで、とくに日本女子大学訪問について言及し、「私は、校長や職員、学生から温かい歓迎を受けた」¹⁹⁾と記している。

ヴァン・ダイクの日本訪問は、ハワイでのキリスト教伝道 100 周年記念会への出席とあわせて計画されたが、同時に、極東の問題が急速に世界の中心問題になりつつあるとの認識のもとに、個人的に、日本についての知識を得ようとするためのものであった²⁰⁾。彼は、横浜から東京、そして日光、京都、伊勢、鳥羽、岐阜をめぐり、日本の伝統文化や自然を楽しんだ。東京では日本女子大学校のほか東京帝国大学で 2 回、早稲田大学で 1 回の講演を行なった。

彼はすっかり親日家になった²¹⁾。1 年近く後の『家庭週報』第 610 号 (1921 (大正 10) 年 4 月 22 日)「英文欄」に、「両洋は既に一致せり」との見出しで「日本印象記」の一節がその訳と共に載っているが、その中で、彼は、いわゆる

を試みられました。茲に挿入の写真は当日本紙のため特に撮影を快諾せられたもの。同挿入の欧文短詩は講演に先ち食堂に於て日本女子大の校のために作られ自署せられたものであります。』¹⁷⁾

そしてキャンパス内で撮ったヴァン・ダイクら一行の写真と上掲の詩のサイン入り写真とともに、麻生正蔵校長の歓迎の挨拶と講演内容の全文を掲載した。



ヴァン・ダイク博士の来校（『家庭週報』第567号（1920年6月18日）
右から上代タノ、令嬢ボール、ヴァン・ダイク博士、麻生正蔵

1週間前の『家庭週報』掲載記事と併せると、ヴァン・ダイクの本学来訪は当初の予定にはなく、彼の来日を知った女子大の側からの要請で実現したことが分かる。成瀬仁蔵の死去から1年余りのちに、成瀬の愛した詩人の来訪が、彼の帰国前日に実現したのである。

講演に先だってヴァン・ダイクは「今日、この学校に参つて、分にすぐれた歓迎をうけました事は、唯もう、「ありがたう」と申し上げるより、ありません。殊に、私の著書の故に、かうした歓迎をうける事は私としては非常に喜ばしいのであります。遠い国に自分の読者をもつといふ事は実に嬉しいものです。」と語った。

昼食は、学生たちの手料理であった。「先刻、学生手づからの日本料理をいたゞいた事も大層、うれしく思つて居ります。お料理は大変、よく美しく出来て居りました。私の娘と私とは、それを箸でいたゞきました」。この席でヴァン・ダイクが日本女子大のために作った詩は、次のようなものであった。麻生校長が挨拶のなかで披露した訳とともに紹介しよう¹⁸⁾。

たゞ一つこゝに愛のみは残つて居る。(572)

Hours fly,
Flowers die
New days,
New ways,
Pass by.
Love stays.

あまりに事物を待ちのぞむ人の為めには
時の経つのは遅すぎる
恐れと心配にとざさるゝ人の為めには、
時の過ぎるは早すぎる。
実に時、
うれひに沈む人にはおそく
喜びに満つる人には早すぎる、
おゝ、されど、愛する人の為めには
時はない。(573)

Time is
Too Slow for those who Wait,
Too Swift for those who Fear,
Too Long for those who Grieve,
Too Short for those who Rejoice
But for those who Love.
Time is not

7 日本女子大学とヴァン・ダイク

桜楓会機関紙『家庭週報』第567号(1920(大正9)年6月18日発行)は「ヴァンダイク博士の来校」との見出しを第1面トップに掲げ、ヴァン・ダイクの日本女子大学来校を次のように報じた。

「既報の通り六月九日午前十一時、米国プリンストン大学英文学教授ヘンリー・ヴァンダイク氏はポール令嬢同伴にて日本女子大学校に来校せられ、家政館食堂にて昼餐の後、講堂に於て「女性の光」なる題下に別項掲載の講演

Hearts unfold like flowers before Thee,
Praising Thee their sun above.
Melt the clouds of sin and sadness;
Drive the dark of doubt away;
Giver of immortal gladness,
Fill us with the light of day!

6 愛のもとで、時は永遠

10 回講義はいよいよ終わりに近づく。成瀬はその講義を端的に、次のように要約する。

「そこで終りに我れ等がこの山上生活に於て経験した経路を考へて見ると初めまづ哲学的立場から入つて次に直感的に進み即ち詩になつて居る所謂エキスタシーに酔ふといふやうなる其の経験の頂上に達して来たのである。即ち無限なる世界に入り永久より永久に流るゝ旋律の波に触れたのである。」
(572)

そして最後に FOR KATRINA'S SUN-DIAL IN HER GARDEN OF YADDO (ヤッドの庭園にあるカトリーナの日時計のために) と題された二つの詩を読み上げる¹⁵⁾。ヤッドとは 1900 年にニューヨーク州サラトガ・スプリングスに、作家だったカトリーナ・トラスクが夫と共に建てた広大な芸術家のための施設の名称である¹⁶⁾。前者の詩は、その庭に設置された日時計に記され、今日でも見ることが出来るという。後者は「Time is」というタイトルで、It's A Beautiful Day なるグループのややロックぽい楽曲や、マーク・マスリ Mark Masri という歌手の、それとはまったく異なる甘いバラード調の楽曲にアレンジされて唄われている。

ヴァン・ダイクのこれらの詩はまことに美しく、シンプルで親しみやすいが、成瀬の訳も思い入れたっぷりのものになっている。

時は飛び去り
美しい花も凋落^{しほれ}てしまふ
新らしい日は来た、新らしい道も開けた
併しそれも亦逝つてしまふ
それ等はみな自分の傍^{そば}を通り過ぎて行く
何一つ自分と一緒に止るものはない、
しかし、しかし、

太陽の方にはり上げて
人生勝利の凱歌を奏しつゝ
歌ひに歌ひ
進み進もう。(568-569)

HYMN OF JOY

TO THE MUSIC OF BEETHOVEN'S NINTH SYMPHONY

(第4連)

Mortals join the mighty chorus,
Which the morning stars began
Father-love is reigning o'er us,
Brother-love binds man to man
Ever singing march we onward,
Victors in the midst of strife;
Joyful music lifts us sunward
In the triumph song of life.

(無題)

喜ばしきかな、喜ばしきかな我れ等は爾^{なんぢ}（至上人格）を讚美崇拜する。
栄えの神よ、愛^{しゆ}の主よ、
われ等の心は太陽の前に笑^えめる花の如くに爾の前に発揚する。
太陽は花の上にある愛の日である。
その如くに、爾はわが罪を悲哀の雲、猜忌^{さいき}と暗黒の世界を照らす。
おゝ、限^{かぎり}なき喜びの与へ主^{ぬし}よ、いつもクク昼の光を以てこの私を充したまへ。
(571)

HYMN OF JOY

TO THE MUSIC OF BEETHOVEN'S NINTH SYMPHONY

(第1連)

Joyful, joyful, we adore Thee,
God of glory, Lord of love;

ful, joyful, we adore Thee.」と訳される。このヴァン・ダイク訳「歓喜の歌」は、英語圏で最も人気のある訳として、賛美歌だけではなく、ゴスペルソングとしても歌われている。とくに1993年の、問題高校再生物語、映画「天使にラブ・ソングを2」で使われ、「Joyful, joyful」の名で広く知られるようになった。日本では平原綾香の歌唱が素晴らしく You Tube などで見ることができる。

成瀬は第1連の詩を読み上げるに先立ち、次のように述べた。

「吾人が経験し得る所のそれは遺傳的のものであつて其所に親もあり先祖もあり又世界もありその世界を創造り給ふた神もあるといふことが考へられる。実に宇宙の實在はこの偉いなる源流でありその大意志、その大潮流は永久から永久に流れて居るものである。」(570-571)

ここで言う「神」はヴァン・ダイク訳の「Thee」、成瀬訳の「爾」であるが、成瀬はこれをわざわざ「至上人格」と言い換えている。この「神」から発する「大意志」「大潮流」は、成瀬が「必然的靈法 (Mental law)」と呼ぶところのものである。

「われ等の心は太陽の前に笑める花の如くに爾の前に発揚する。」

「その如くに、爾はわが罪を悲哀の雲、猜忌と暗黒の世界を照らす。」

ヴァン・ダイク訳は成瀬によって、さらに敷衍されている。

原詩は1913年版詩集の *Songs of Hearth and Altar* の項にある¹⁴⁾。

(無題)

あかつき

暁の明星が奏しはじめた大合唱に

有限な我等人間も

調子を和して歌ひ歌はう。

おゝ

父の慈愛は我々の上を統御し兄弟の愛は人と人との心をむすぶ、

あゝ

そこに天地の偉なる楽の響わたる。

さうして

人生の戦ひの真只中に居る我々は

いつもいつも歌ひつゝ

勇みに勇んで進軍する

おゝ

喜悅に満ちた歌ごゑを

(無題)

北国の高い山の頂に
縦の喬木がたゞひとり
寂しく、寂しく立つて居る。
吹雪が眞白^{きぬ}い衣を以て彼れの身幹^{からだ}を被ふ期間^{あひだ}
彼れは、友を夢みて静かに眠る——遠い南の国の、熱い^や炎けた砂の中に
沈黙^{ふけ}に耽つてたゞひとり立つ棕櫚^{しゆろ}の木を——
如何に、如何にと思ひつゞけて。(567)

EIN FICHTENBAUM

A FIR-TREE standeth lonely
On a barren northern height,
Asleep, while winter covers
His rest with robes of white.
In dreams, he sees a palm-tree
In the golden morning-land;
She droops alone and silent
In burning wastes of sand.

5 生命^{いのち}の勝利—歡喜の歌

かくして「山上の生活」は、最後のクライマックスに向う。成瀬は語る。

「我々の前途には如何に困難苦闘があらうとも最後は生命^{いのち}の勝利である。天地の大生命と共に在る生命の勝利である。この生命の勝利を謳ふ我々の凱歌は常に我々をして太陽に向つて、永久に向つて向上せしむるものである。この人生歡喜の音楽こそは、即ち星が歌ひ初めた天地の大合唱である。」(569)

ここで成瀬が読み上げるヴァン・ダイクの二つの詩は、かのベートーヴェンの第9交響曲のシラー原作「歡喜の歌」を英訳したものである。成瀬はまず、第4連を読み上げる。後段、ヴァン・ダイクの英詩は、成瀬によってさらにパラフレーズされて高潮し、人生の困難に立ち向かう学生たちへの讃歌となっている。

ひきつづき読み上げられるのは、「歡喜の歌」の第1連である。「Freude, schöner Götterfunken,」で始まるシラーの原詩は、ヴァン・ダイクによって「Joy-

そは、自己といふ牢獄のみ
又、その門を、
ひらけと命じうるものは
愛と名づくる天使あるのみ、
その愛が、汝を召しに来た時
起つて速かに彼に従へ
彼に導かるゝその道は
暗黒の中に、横^{よこたは}つて居るかも知れない
しかし、遂には
輝き燦とした光明世界に到達する。(566-567)

THE PRISON AND THE ANGEL

SELF is the only prison that can ever bind the soul;
Love is the only angel who can bid the gates unroll;
And when he comes to call thee, arise and follow fast;
His way may lie through darkness, but it leads to light at last.

4 愛の力

「吾人が真に大なる使命に向つて進軍せんとする時これを進めこれを導く者は唯愛これのみである。」(567)と成瀬は語る。そして次の詩を「我等は孤独ならず」という項¹²⁾を起こしたなかで読み上げる。原詩は前の詩と同じ項に収録された、「一本の樅の木」と題するハイネの詩をヴァン・ダイクが英訳したものである¹³⁾。

「人はその肉体に於ては、遂に相離れなければならないものである、而も困難は益々集つて来る。その時我れ等の^{れい}霊の交友を思ひ出づることが出来たら我れ等は困難の中に在つて最幸福なるものである、恰も北方の喬木が南熱帯の地に在るその友を念つてその念頭より離さざる如く、我等は如何なる場合にも孤独ではない」(567)と、軽井沢三泉寮の大樅の木を示しながら成瀬は語る。同時にこれは、約1年半後の、成瀬の告別講演をも想起させる。

さらに成瀬は次のように端的に述べている。

「吾人は如何なる場合にもたゞ孤独で苦しんで居るのではない、遙かなる遠方の友が自分を思つて呉れて居る、自分も亦友を思つて心を一にする事が出来るのである。」(568)

AND THE ANGEL という詩を読み上げる。魂を縛るのは自己という牢獄のみ、これを解き放ち得るのは、愛という天使、と謳う詩である。

原詩はいずれも *The Builders and Other Poems* の Lyrics of Friendship and Faith の項に収録されている¹¹⁾。

(無題)

『我が喜びは使命である
使命は喜びである』とは
太古ヘブライの先人が訓へた金言である

人生の高嶺に向ふ時
其の絶頂を仰ぎ見よ
其処には『愛』と名づくる君が立つて
さうして彼はいふ
『使命が喜びである時
人の生命は神聖である』(565-566)

JOY AND DUTY

“Joy is a Duty,” — so with golden lore
The Hebrew rabbis taught in days of yore,
And happy human hearts heard in their speech
Almost the highest wisdom man can reach.

But one bright peak still rises far above,
And there the Master stands whose name is Love
Saying to those whom weary tasks employ:
“Life is divine when Duty is a Joy.”

(無題)

若し、この私の魂を
縛り得るものがあるとすれば

一体、お前はどこにさまようて居るのか」と、

その答へは、

笑ひをふくみ、楽の調子は、

よろこばしく、――

「あゝこの学校こそ、私の楽しいホームである」と。(558-560)

SCHOOL

I PUT my heart to school

In the world where men grow wise:

“Go out,” I said, “and learn the rule,”

“Come back when you win a prize.”

My heart came back again:

“Now where is the prize?” I cried, —

“The rule was false, and the prize was pain

“And the teacher’s name was Pride.”

I put my heart to school

In the woods where veeries sing

And brooks run dear and cool,

In the fields where wild flowers spring.

“And why do you stay so long

“My heart, and where do you roam?”

The answer came with a laugh and a song, —

“I find this school is home.”

3 活動の喜び

瞑想、自念によって「至上人格」と一体化し、この世界に生きる者の使命を自覚したとき、人はそこから無限の活動の源泉を得ることができる。「使命」(Duty)は「喜び」となり、「喜び」は「使命」となる。そしてそれらを繋ぐものが「愛」である。成瀬はJOY AND DUTYという詩に続けて、THE PRISON

我れ等の学校

私は初め、皆人が賢くなるといふ此の世の学校に心を入れた。

さうして私は、

私の心に斯ういひ聞かせた。

「私の心よ、

規則を学んでおいで、

一つの褒美を貰つておいで、

そして、それらが得られたならば、

直ぐ又こゝに帰つておいで」

と、

間もなく、私の心は帰つて来た、

おぼえず、私は、かう叫んだ、

「一体、お前のどこに、その獲物を持つて居るのか」

「あゝ、あの学校に行きは行つたが、何一つ、

本当の事は教はず、

其の獲物とは、

たゞ苦痛、たゞ煩悶、

その外には何もない、

おぼえた先生の名は傲慢、

学ぶ知識は虚偽であつた。」

私の心の答へはかなしかつた。

それで、私は学校を替へた、

其所は、鳥が楽しく歌つて居り、

小川が涼しく、清らに流れ、

野の花が一面に咲き満ちた

原野の森の学校である

私はこゝに全く心を置いた。

しばらく経つて私は尋ねた、

「おゝ、私の心よ、

こんなに永い間、何故、

お前はとゞまつて居るのか、

2 「山上の生活」のヴァン・ダイク

「山上の生活」のフィナーレとなる第9講と第10講は「山上生活に於ける結論会」と題される。第9講の冒頭で成瀬は次のように述べる。

「今夏三週日の軽井沢の山上生活は我れ等に種々の経験と暗示とを与へた。我れ等は今、やがてこの山上の生活を了へて各自その使命のある所に向はんとして居る。即ち大自然の黙示もくしを読んでこれを我れ等の実生活の上に生活せんとするものである。」(556)⁹⁾

成瀬は「山上の生活」で、「人工の美」と「自然の美」とを対比して、「人工の美」は「自然の美」を超えることはできない、と語った。大自然を貫く「必然的靈法 (Mental law)」を「瞑想」即ち「自念」という方法によって感得すべきだと論じた。こうすることによって、人は「至上人格 (Supreme Person)」と一体化することができる。

「人生の困難、蹉跎、誤解は皆生活の旋律である。大自然の楽律である」(557)。こう語って成瀬は前号で紹介したナイハルトの最後の詩を読み上げた。そして成瀬はひきつづき、次のように語り、ヴァン・ダイクの SCHOOL という詩を読み上げる。

「我れ等の友は大自然であり、我れ等の師も又大自然である。宇宙にありとあらゆるものは皆我が兄弟であり我が肉親の一部である。山は自然の姿を表はし川は宇宙の心を奏で、居る。人間がこの世界に於てものを学ぶといふことは即ちこの宇宙の黙示もくしを読み、その音楽を聞き、その鍛錬をうけることである。我れ等の山上生活の幾週間に亘る修養の目的もこの意志を養ふに外ならぬのである。」(558)

「規則」と「褒美」が支配する「此の世の学校」。そこで得たものは「苦痛」と「煩悶」。おぼえた先生の名は「傲慢」、学ぶ知識は「虚偽」。これに対して「原野の森の学校」こそ「私の楽しいホームである」。このように、いわば「人工の学校」と「自然の学校」を対比した詩に、成瀬はあえて「我れ等の学校」という訳語を当てた。成瀬は、既存の一般の学校を「Student for the school」と批判し、自ら創設した学校を「School for the student」と称した。これをこの詩に重ねあわせたであろう。

成瀬の訳は原詩を敷衍して自在である。成瀬の、この詩に対する共感がよく表れている。

原詩は詩集 *Songs out of Doors* 収録の、「1901 年春」と注記されたものである¹⁰⁾。

本では1921年に大日本文明協会刊行書の1冊として、『亜米利加魂』と題して翻訳出版された。

さらにヴァン・ダイクは、プリンストン大学時代のクラスメイトだったウィルソン大統領によって1913年にオランダ及びルクセンブルグ公使に任命され、第一次世界大戦下のヨーロッパで米国民保護に尽力するなど外交官としても活動した。

このようにヴァン・ダイクの才能は、まことに多彩な分野で発揮された。19世紀末から20世紀にかけて最も活躍したアメリカの知識人であり、文化人の一人であったと言える。

ところで、彼の伝記を読んでいると、成瀬にも関わる、次のような意外な事実に出会って、驚かされた。ダートマス大学学長となったタッカーの後任として、アンドーヴァー神学校教授に選任されたというのである⁶⁾。これは成瀬留学中の1893年3月のことで、同年3月18日の*The New York Times*でも報じられた。ヴァン・ダイク自身はこの人事に大いに乗り気のようにあったが、彼が牧師をする長老派教会側の引きとめや健康上の理由もあって、結局、実現しなかった。そしてその7年後に母校プリンストン大学の教授となった、というわけである。成瀬は、留学したばかりのアンドーヴァー神学校で、タッカーから研究面で多くの影響を受け、また私的にも、病床でタッカーのみならずその妻の手厚い看護を受けるなど多大な恩義を受けた。タッカーの後任にヴァン・ダイクが選任されたとき、成瀬の留学先はすでにクラーク大学に移っていたが、この事実を当時の成瀬は知っていたかどうかは不明である。

ヴァン・ダイクはプリンストン大学卒業生にふさわしく、長老派教会の圏内にとどまった、と言うべきかもしれない。しかし彼は同時に、自ら編んだエマソンの論文集に、共感をこめた解説文を書くなど⁷⁾、自由な思想の持ち主でもあった。

もっとも、成瀬仁蔵がこのようなヴァン・ダイクの多面的な活動をどの程度知っていたかは明らかではない。彼が魅かれたのは、何よりも、平明な言葉でつづられた、美しい韻律の詩そのものであったであろう。

ヴァン・ダイクは釣りを好み、自然の中で時を過ごすことを愛した。そしてしばしば「人は自然の一部ではない。自然と融合して一体化しているのだ」と語ったという⁸⁾。こうした点にも、同じく自然を愛した成瀬と共通するところがある。

に留学し、帰国後長老派教会の牧師となった。このようにヴァン・ダイクは、ナイハルトのように、少年時代に父に家出され母親一人の手で貧しい家庭に育ち20歳になる前に数々の仕事を転々としたのとは異なり、しっかりした家庭のもとで、順調な経歴を重ねたと言える。

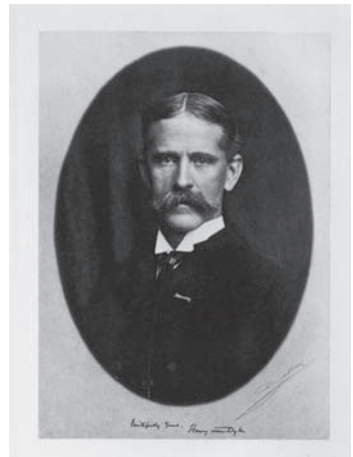
ヴァン・ダイクに恵まれたのは、このような経歴だけではない。彼は多彩な才能の持ち主で、作家であり評論家であり詩人でもあった。息子ターシャスの執筆した伝記の巻末リストによると、1884年に32歳で初めて刊行した*The Reality of Religion*（『宗教の真実』）から、死の前年1932年に趣味の釣りについて書いた最後の著書*A Creelful of Fishing Stories*（『魚籠いっぱい釣りの話』）に至るまで、編著書だけでも75冊あまりの多きにのぼる。小説類の多くはキリスト教信仰にもとづく教訓的で寓話的なもので、文章は平明で挿絵も入るなど一般にも親しみやすく、多くの人気を得た。なかでも1896年刊行の*The Story of the Other Wise Man*⁴⁾は各国語に翻訳され、日本では『もう一人の賢者』などのタイトルで数種の翻訳があり、戦後には児童向けの絵本としても出版されている。

このほか、1919年に岩波書店から出版された中川景輝訳『史劇ナアマン』⁵⁾などをはじめ、日本語の翻訳も数多く、その多くは、キリスト教関係者によって翻訳された聖書にもとづく話である。また石井桃子訳の「一握りの土」が、1936年新潮社刊行の日本少国民文庫、山本有三編『世界名作選（二）』に収録されているが、この本は美智子皇后が「子供時代の読書の思い出」で語ったことをきっかけに1998年に復刊された。

ヴァン・ダイクの親しみやすい文は、今日でも「名言集」などに採り上げられ、「山上の生活」で成瀬が紹介した詩は、後述のように、バラードやロックに、あるいはゴスペルソングとして映画に使われたりしている。

しかしヴァン・ダイクの才能はこれにとどまるものではない。

彼は1900年にプリンストン大学の英文学教授に就任し、テニソンの詩集を編集解説し、エマソンの論文集も編むなどして1923年までその職にあった。1908年から翌年にかけてはフランスに滞在しパリ大学などでアメリカ文学を講じ、この間行なった講演は*The Spirit of America*という本にまとめられ、日



The Poems of Henry van Dyke (1913年版) 巻頭の写真

「軽井沢山上の生活」の詩について

—原詩を尋ねて— (下)

片桐 芳雄

1 ヘンリー・ヴァン・ダイク

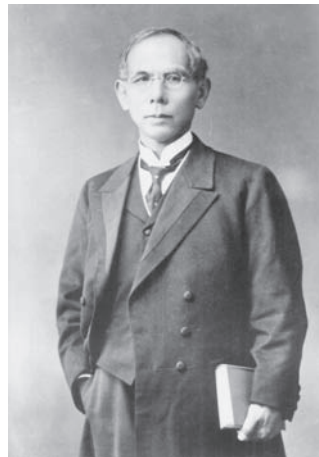
前号で記したように、1917（大正6）年夏に軽井沢三泉寮でおこなわれた成瀬仁蔵校長の10回講義「軽井沢山上の生活」（以下必要に応じて「山上の生活」と記す）では、13編の詩が紹介された。そのうち第4講から第9講までの5編がジョン・G・ナイハルト（John Gneisenau Neihardt, 1881-1973）のもの、第9講の1編と最終の第10講で紹介された8編はすべてヘンリー・ヴァン・ダイク（Henry van Dyke, 1852-1933）のものであった。

ヘンリー・ヴァン・ダイクはナイハルトと比べると本学ではなじみが深い。成瀬は「山上の生活」で詩を朗読するさいに、幾度かその名前をあげているし、成瀬の最もよく知られている下の写真の左手にある本はヴァン・ダイクの詩集である¹⁾。またヴァン・ダイクは、成瀬死去約1年後、1920（大正9）年6月に本学を訪れて、後述のように大歓迎を受けている。

こうした事情もあって、ヴァン・ダイクの著書は、成瀬文庫に3冊、本学図書館には編著を含めて17冊（他に日本語訳本4冊）もある。これは日本の大学図書館の中ではかなり多いほうである²⁾。

ヘンリー・ヴァン・ダイクは、ナイハルトよりもいろいろな意味で恵まれた人であった³⁾。

彼の祖先は17世紀半ばにオランダのアムステルダムからアメリカに移住し、祖父は医者、父は長老派教会の牧師であった。1852年にペンシルヴァニア州フィラデルフィアのジャーマントウンに生まれ、ニューヨークにある中等学校を経て、プリンストン大学とプリンストン神学校を卒業した。その後2年間ベルリン大学



「ヴァンダイクの詩書を持てる先生（大正七年六月）」（「成瀬先生記念帖」）

成瀬記念館

二〇一三年度・活動の記録

二〇一三年度業務日誌

- 名、ゼミで見学
- 4・20(土) 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者13名
- 5・1 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 10名見学、説明。附属中学校1年生256名見学(分館も)
- 5・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 4名見学、説明
- 5・11(土) 泉会定時総会につき延長開館、見学者42名
- 5・24 朝日カルチャーセンター講座「東京たてもの探訪」で29名見学、説明(分館も)
- 5・27 西生田記念室の展示ケース修繕
- 5・28 展示オープン(西生田)
- 5・29 全国大学史資料協議会東日本部会2013年度総会(於 中央大学後楽園キャンパス)に参加(杉崎)
- 5・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 3名及び教員1名見学、説明
- 6・1 雑司が谷一丁目町会、キャンパス見催、分館視察
- 6・5 成瀬記念講堂の成瀬仁蔵胸像を外に貸し出すため、西生田記念室保管の石膏像を目白へ運搬。12月20日返却
- 6・14 展示オープン(目白)
- 6・15(土) 西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者50名
- 6・16(日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者209名
- 6・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 18名及び教員2名見学、説明
- 6・19 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 39名及び教員6名見学、説明
- 6・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 21名及び教員1名見学、説明
- 6・22(土) 成瀬仁蔵生誕記念日につき特別開館、見学者43名。分館特別公開、説明、見学者40名
- 6・24 成瀬記念館運営委員会(本年度第1回)
- 6・26 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校) 74名見学、説明
- 7・1 附属豊明小学校6年生40名見学
- 7・4 附属豊明小学校6年生37名見学、
『成瀬記念館2013 No.28』(2千部)納品
- 4・1 「新任職員の集い」参加者見学(成瀬記念講堂も)、主事他説明
- 4・2 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者29名
- 4・9 展示オープン(目白・西生田)
- 4・10 西生田記念室、附属中学校1年生2クラス見学
- 4・13(土)「ホームカミングデー」につき平常通り開館、見学者106名、分館見学者67名
- 4・17 附属豊明小学校4年生120名自由見学
- 4・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 36名見学、説明
- 4・19 西生田記念室、教育学科の学生22名、ゼミで見学

- 7・5 附属豊明小学校6年生37名及び教員1名見学
- 7・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)57名見学、説明
- 7・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)19名見学、説明
- 7・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)25名見学、説明
- 7・13 ブリザベーション・テクノロジーズ・ジャパン開催ブックキーパー見学会(於 大宮)に参加(杉崎)
- 7・17 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校)44名見学、説明
- 7・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)44名及び保護者49名、教員1名自由見学
- 7・22 優良防火対象物認定の再申請の手続きと消防訓練
- 7・31 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)4名見学、説明
- 8・2 電動書架定期点検
- 8・3(土)「オープンキャンパス」のため延長開館、見学者195名
- 8・4(日)西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者189名
- 「キャンパス見学ツアー」参加者に説明(10回実施)
- 8・7 本年度当館受入れ予定の博物館実習生6名と事前打合せ
- 8・16 大塚警察署担当者、銃砲の保管状況調査のため来館
- 8・22 消防設備点検(講堂地下倉庫・分館も)
- 8・23 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)34名見学、説明
- 8・27(9・3 博物館実習(住居学科1名、日本文学科1名、史学科2名、文化学科1名、科目等履修生1名)
- 9・7 附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき臨時開館、見学者32名
- 9・22(日)西生田記念室、S A P I X 説明会のため特別開室 見学者0名
- 9・24 展示オープン(目白・西生田)
- 9・25 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)40名見学、説明
- 10・1 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)36名及び教員2名見学、説明
- 10・3 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため16名見学、説明
- 10・4 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)2名見学、説明。西生田記念室、多摩消防署立入検査
- 10・5(土)～6日(日)西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者合計65名
- 10・7 日本文学科の学生8名及び教員2名、授業で見学
- 10・16 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」、台風のため中止
- 10・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)37名及び教員2名見学、説明
- 10・19(土)～20(日)目白祭につき平常通り開館、見学者合計240名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計13名
- 10・23 児童学科24回生分館見学、説明。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)42名見学、説明
- 10・24 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)42名見学、説明、(1校)34名自由見学
- 10・26(土)～27(日)西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計31名
- 10・29 入学課から依頼の大学見学の高校生

生(1校) 38名見学、説明

11・7 防災訓練

11・9(土) 西生田記念室、附属高等学校説明会につき特別開室、見学者5名

11・15 入学課、大学案内のため館内撮影

11・16(土) 故宮本美沙子元学長の大学葬につき特別開館、134名来館。会議室にて「宮本美沙子追悼展」を28日まで開催。

西生田記念室、附属中学校説明会につき特別開室、見学者15名

11・18 児童学科の学生4名及び教員1名、授業で見学。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)12名見学、説明

11・25 燻蒸のため資料搬出(11・29終了、搬入)

11・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)20名見学、説明

12・3 西生田講堂運用委員会出席(岸本)

12・7(土)「入試相談会」のため延長開館、見学者50名。NHKカルチャーセンター25名講堂見学、説明。地域美産研究会「パブリックアートフォーラム」10名見学、説明(分館・講堂も)

12・9 入学課から依頼の大学見学の高校

生(1校) 32名見学、説明

12・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)37名見学、説明

12・19 文京ミュージズフェスタ2013(於 文京シビックセンター)に参加

1・14 展示オープン(目白)

1・25 西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於 西生田成瀬講堂)につき特別開室、見学者62名

1・28 展示オープン(西生田)

2・1~3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計69名

2・15(土) 西生田記念室、附属中学校新入生保護者会につき特別開室、見学者35名

2・21 消防設備点検(分館)

3・4 創立者命日につき特別開館、見学者49名

3・12 電動書架定期点検

3・19 展示オープン(西生田記念室)

3・20 西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者61名

3・29(土)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者156名

二〇一三年度の成瀬記念館運営委員

佐藤和人館長(学長)、石川孝重家政学部長、永村眞文学部長/成瀬記念館担当理事、山田忠彰人間社会学部長、今市涼子理学部長、川上清子家政学部通信教育課程長、馬場聡教養特別講義1委員会委員長、小山高正教養特別講義2委員会委員長、島崎恒藏図書館長、三神和子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、高頭麻子生涯学習センター所長、若林元常務理事、真橋美智子附属中高担当理事(副学長)、大場昌子附属幼小担当理事(副学長)、後藤祥子桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記念館主事

二〇一三年度成瀬記念館構成メンバー

館長・佐藤和人、主事・吉良芳恵、館員・岸本美香子(主任)、杉崎友美、非常勤・梅原裕香(10月より)、大門泰子、大谷美枝子、加藤きよみ、鯨岡詩織、佐久間妙美、高橋未沙、長尾順子(9月まで)、山本文子(1月まで)

博物館実習

二〇一三年度の博物館実習(第二四回)は、八月二十七日(火)から九月三日(火)までの六日間の日程で行った。実習生は、住居学科一名、日本文学科一名、史学科二名、文化学科一名、人間社会研究科教育学専攻一名で、企画展「阿部次郎をめぐる手紙」展の準備に参加した。

実習生は成瀬記念講堂や分館、雑司ヶ谷霊園をめぐる本学の歴史を学ぶとともに、阿部次郎に書簡を送った茅野雅子・蕭々、網野菊、平塚らいてう等に関する資料を調査、解説パネルを作成した。このほか、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

業務統計

開館日数 目白 一八三日

西生田 一四五日

入館者数 目白 約六一五〇人

西生田 約一五〇〇人

資料提供

学園史関係質問受付および資料提供

一〇五件

出版・映像のための資料提供

三五件

その他

『成瀬記念館二〇一三 No.28』の発行
二〇〇〇部

『日本女子大学史資料集第五』(六) 日本

女子大学校規則 大正一三年―昭和二年三

月』の発行 一五〇部

成瀬記念館展示のご案内(二〇一三年度)

の制作 二〇〇〇部

図録「阿部次郎をめぐる手紙」の発行
三〇〇〇部

図録「激動の時代を生きて―高良とみ」の

発行 五〇〇部 ポストカード作成

四〇〇部

DVD「激動の時代を生きて―高良とみ」

の制作

DVD「文京区指定有形文化財 成瀬記念

館分館(旧成瀬仁蔵住宅)」の制作

博物館実習生受入れ(一六名)

研修等参加(研究会・全国大学史資料協議

会東日本部会二〇一三年度総会、見学会・

Preservation Technologies Japan 主催の

ブックキーパー見学会、その他・文京

ミュージズネット、展示見学など)

資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一三年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

4・9〜6・8

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と「住」展

6・14〜7・31

軽井沢夏季寮の生活―戦時下の三泉寮展

9・24〜12・21

阿部次郎をめぐる手紙展

1・14〜3・4

激動の時代を生きて―高良とみ展

〔西生田記念室〕

4・9〜5・21

シリーズ「天職に生きる」

成瀬仁蔵と自然科学教育展

5・28〜7・31

軽井沢夏季寮の生活―戦時下の三泉寮展

9・24〜12・20

故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す

―上代タノ展

1・28〜2・28

日本女子大学のおひなさま展



展示の記録(二〇一三年度)

●成瀬記念館(目白)

「シリーズ“天職に生きる”
成瀬仁蔵と「住」展
2013.4.9(火)～6.8(土)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は本学の住教育に焦点を当てた。
アメリカ留学時代から住環境に関心を抱いていた成瀬は、本学設立時から家政学のカリキュラムに住教育を取り入れた。そし

「軽井沢夏季寮の生活 戦時下の三泉寮」展
(目白)2013.6.14(金)～7.31(水)、
および8.8・15・22・29
(西生田)5.28(火)～7.31(水)、および8.4



て、その住教育をより充実させたのは家政学部卒業生の井上秀(のち第四代校長)、清水組(現在の清水建設株式会社)の技師長を務めた田辺淳吉、早稲田大学建築学科教授佐藤功一、考現学で有名な今和次郎であった。講義で使用されたテキストや、佐藤功一設計の明桂寮の図面等を展示した。
また、一九〇一(明治三四)年に建てられた成瀬の住まいであり、本学創立期の唯一の遺構である成瀬記念館分館を紹介した。

「阿部次郎をめぐる手紙」展
2013.9.24(火)～12.21(土)



軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。今回のテーマは、戦時下の学童集団疎開と大学部学生の勤労動員。
一九四四(昭和一九)年八月から一年二ヶ月の間、豊明小学校児童のうち縁故先のない者たちが、三泉寮で寝起きを共にする集団疎開生活を送った。その生活の様子や、同時期に行われた大学部学生の軽井沢での援農活動について紹介した。
学生だけでなく、疎開生活を共に送った元教員や卒業生が多数来館し活況を呈した。

二〇〇四（平成一六）年、阿部次郎の保管していた書簡が阿部の三女大平千枝子氏により成瀬記念館に寄託された。そして、二〇一〇年には青木生子元学長・名誉教授、岩淵（倉田）宏子教授、原田夏子元専任講師により研究成果をまとめた『日本女子大学叢書五 阿部次郎をめぐる手紙』が出版された。

本展は、同書が二〇一二年に山形県酒田市から「第二九回阿部次郎文化賞」を受賞したことを記念して開催。茅野雅子・蕭々田村俊子、平塚らいてう、湯浅芳子、鈴木悦等の書簡を多数紹介した。この展示に際し、原田夏子先生に多大なるご協力を賜った。



博物館実習の様子

なお、この展示では博物館実習生が解説パネルの一部を作成した。

「宮本美沙子追悼展」 2013.11.16(土)～28(木)



会議室の様子

一〇月六日に逝去された本学第一〇代学長・理事長、宮本美沙子名誉教授の大学葬が一月一六日に執り行われ、当館では故人の遺品や写真等を集めた追悼展を開催した。撮影日時や場所が丁寧に書き込まれたアルバムや愛用の品々とともに、学長時代に式典等で着用した衣服も展示された。会場内には式典で挨拶される宮本先生の映像も流され、来場者は在りし日の宮本先生に思いを馳せ、故人を偲んだ。

「非戦を生きる—高良とみ展」 2014.1.14(火)～3.4(火)



高良とみ展ポスター

本学英文学部一四回生で、心理学者・平和活動家・参議院議員として活躍した高良とみを取り上げた。本学卒業後に米国に渡りPh.D.（博士号）を取得、女性研究者として本学で教鞭をとる傍ら、タゴールやジェーン・アダムスらと平和思想を共にし、平和運動に参画した。戦後は、戦中に結果として戦時体制に与した反省を胸に、女性の地位向上と平和を掲げて女性初の参議院議員の一人となった。一九五二（昭和二七）年、国交未回復の旧ソ連、中国を戦後初めて訪問、翌年には在華邦人帰還事業で中心的な役割を果たすなど目覚ましい活躍をとげた。激動の時代を常に前を向いて歩み続けた九六年の軌跡を五つのパートに分けて紹介、その生涯を辿った。

「シリーズ“天職に生きる”
成瀬仁蔵と「自然科学教育」展
2013.4.9(火)～5.21(火)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は、成瀬が本学の理科教育のために招聘した東京帝国大学教授長井長義について取り上げた。徳島大学薬学部からご提供いただいた若き日の長井や妻テレレの写真、長井が死去の前年に揮毫し長く香雪科学館に掲げられていた扁額、授業で使用したドイツのライツ社製の顕微鏡等を展示した。

「故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す
—上代タノ」展
2013.9.24(火)～12.20(金)



上代タノは一九一〇(明治四三)年に日本女子大学校英文学部を卒業後、米国ウエルズ・カレッジに留学、帰国後は本学の英文学部教授となった。その後も本学で教授を務める傍らミシガン、ケンブリッジ大学に留学し、一九五六(昭和三一)年に第六代学長に就任した。

本展では成瀬や新渡戸稲造との交流がうかがえる書簡や自筆の原稿、留学時代の身の回りの品々や、博士の学位を取得したときのガウン、婦人国際平和自由連盟会長時代の資料、受賞した勲章等を展示した。

「日本女子大学のおひなさま」展
2014.1.28(火)～2.28(金)



恒例となった「おひなさま展」。日本女子大学の学寮や、卒業生宅などで飾られてきた明治・大正・昭和の雛人形を展示している。

七段飾りや市松人形、屏風、家政学部の授業でとりあげたひなまつりのごちそうを記したノートなどを展示した。そのほか、牛若丸と弁慶、浦島太郎、高砂など、当時ひな人形と一緒に飾られていた人形も紹介した。

■成瀬記念館より

昨年度は、二つの大きな企画展示を開催することができました。その一つが「阿部次郎をめぐる手紙展」です。青木生子・岩淵（倉田）宏子・原田夏子各先生方の研究成果である『阿部次郎をめぐる手紙』が、二〇一二年に酒田市から「阿部次郎文化賞」を受賞したことを記念して企画されたものです。阿部次郎は、戦前の学生の必読書と言われた『三太郎の日記』で有名ですが、平塚らいてうなど本学出身者との交流を示す多くの書簡が、ご子孫から成瀬記念館に寄託されています。生の書簡からは書き手の人柄が伝わってきて、うったえるものがありました。もう一つが「激動の時代を生きて 高良とみ展」です。この展示では、研究者・平和運動家・政治家としてスケールの大きい活動をなさった高良とみ像を再発見し、魯迅やタゴール、ガンジーとの交流など、本学がアジアと繋がってきた歴史を追体験することができました。

なお展示図録をご希望の方は、成瀬記念館までご連絡を頂ければ幸いです。（吉良）

今年の一〇月で成瀬記念館は開館三〇年になります。前身である「成瀬記念室」から受け継いだ成瀬仁蔵および学園史資料を中心に収蔵資料目録を編纂中です。また今年には、成瀬の住まいであった成瀬記念館分館の移築計画が大きく進む予定です。環状四号線の拡幅工事に伴い、現在の場所での公開は間もなく終了となります。（岸本）

「阿部次郎をめぐる手紙」展と「高良とみ」展の図録を二冊制作しました。前者はほとんどの資料が書簡、後者は書簡や絵画、衣類やタイプライターなどの日用品といった様々な資料がありました。タイプの違う図録を作るのは大変でしたが、図録が出来上がっていく様子を見るのは面白い作業でした。（杉崎）

昨年度は、自分の研究テーマである「疎開」を題材にした「戦時下の三泉寮」を行うことが出来ました。資料調査に時間がかかり焦ったこともありましたが、附属小学校や卒業生の方々からも資料をお寄せいただき、多くの貴重な資料を展示することが出来ました。今後も一つ一つの仕事に丁寧に取り組んでいきたいと思えます。（高橋）

成瀬記念館 2014 No. 29

二〇一四年七月八日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

電話（〇三）五九八一―三三七六

FAX（〇三）五九八一―三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三二六―一四

※無断転載、複製はご遠慮ください



日本女子大学
成瀬記念館

表紙は、上の校章を模して製作された記念館
スタンドグラスをデザインしたものである。